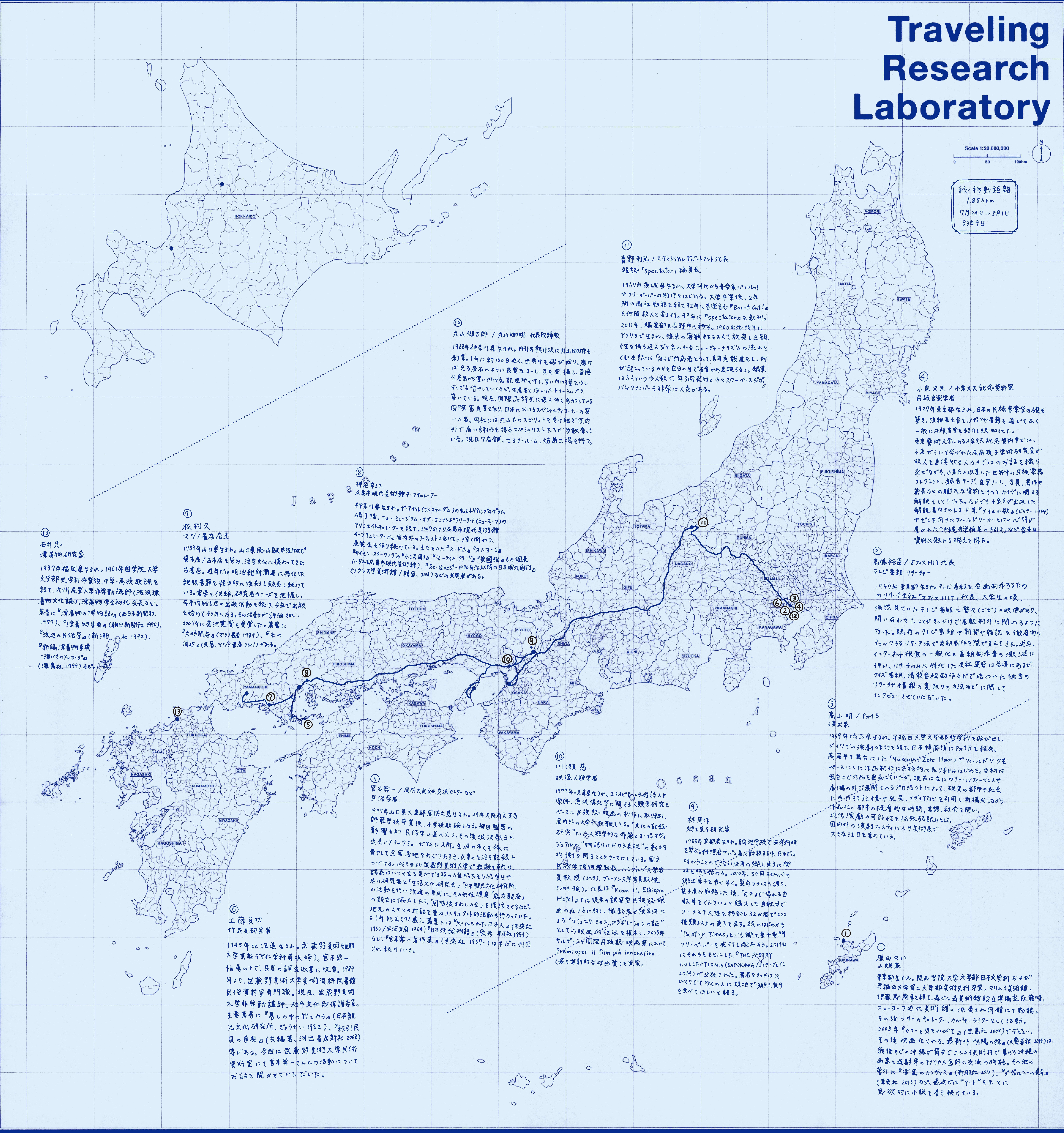
Traveling Research Laboratory



総移動距離
1,856km
7月24日～8月1日
8泊9日

⑫

丸山健太郎 / 丸山珈琲 代表取締役

1968年神奈川県生まれ。1991年軽井沢に丸山珈琲を創業。1年に約150日近く、世界中を飛び回り、磨けば光る原石のように良質なコーヒー豆を発掘し、直接生産者から買い付ける。試見所を作る、買い付ける量を少しずつでも増やしていくなど、生産者と深いパートナーシップを築いている。現在、国際品評会に最も多く参加している国際審査員であり、日本におけるスペシャルティコーヒーの第一人者。同社には丸山氏のスピリットを受け継ぎ国内外で高い評価を得るスペシャリストたちが多数育っている。現在7店舗、セミナールーム、焙煎工場を持つ。

⑪

青野利光 / エディトリアルデパートメント代表
雑誌「spectator」編集長

1967年茨城県生まれ。大学時代から音楽系パンフレットやフリーペーパーの制作をはじめる。大学卒業後、2年間の商社勤務を経て92年に音楽誌『Bar-f-Out!』を仲間数人と創刊。99年に『spectator』を創刊。2011年、編集部を長野市へ移す。1960年代後半にアメリカで生まれ、従来の客観性をあえて放棄し主観性を持ち込んだと言われるニュージャーナリズムの流れをくむ本誌は「自らが行為者となって、調査報道をし、何が起こっているのかを自分の目で確かめ表現する」。編集は3人という少人数で、年3回発行と少々スローペースだが、バックナンバーも非常に人気がある。

④

小泉文夫 / 小泉文夫記念資料室
民族音楽学者

1927年東京都生まれ。日本の民族音楽学の礎を築き、後継者を育て、メディアや書籍を通じて広く一般に民族音楽を紹介し認知させた。東京藝術大学にある小泉文夫記念資料室では、小泉ゼミにて学ばれた尾高暁子学術研究員が故人を直接知る人ならではのお話を織り交ぜながら、小泉氏の収集した世界中の民族楽器コレクション、録音テープ、自筆ノート、写真、著作や蔵書などの膨大な資料とそのアーカイヴに関する解説をして下さった。なかでも小泉氏が出版した解説書付きのレコード集『ナイルの歌』(ビクター 1964)やゼミ生向けにフィールドワーカーとしての心得が書かれた「沖縄音楽採集の手引き」など貴重な資料に触れる機会を得た。

⑧

神谷幸江
広島市現代美術館チーフキュレーター

神奈川県生まれ。デ・アペル(アムステルダム)のキュレトリアルプログラム修了後、ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリーアート(ニューヨーク)のアソシエイトキュレーターを経て、2007年より広島市現代美術館チーフキュレーターに。国内外のアーティストの制作に深く関わり、展覧会を作り続けている。主なものに『ス・ドホ』『オノ・ヨーコ』『サイモン・スターリング』『小沢剛』『マーティン・クリード』『蔡國強』らの個展(いずれも広島市現代美術館)、『Re-Quest-1970年代以降の日本現代美術』(ソウル大学美術館/韓国、2013)などの共同展がある。

⑦

松村久
マツノ書店店主

1933年山口県生まれ。山口県徳山駅前市街地で貸本屋/古本店を営み、活字文化に携わってきた古書店。近年では明治維新関連に特化した絶版書籍を精力的に復刻し販売し続けている。需要と供給、研究者のニーズを把握し、年平均約6点の出版活動を続け、今年で出版を始めて40年になる。その活動が評価され、2007年に菊池寛賞を受賞した。著書に『大時閑店』(マツノ書店 1989)、『本の周辺』(共著、マツノ書店 2001)がある。

⑬

石井忠
漂着物研究家

1937年福岡県生まれ。1961年国学院大学文学部史学科卒業後、中学・高校教諭を経て、九州産業大学非常勤講師(海洋漂着物文化論)、漂着物学会初代会長など。著書に『漂着物の博物誌』(西日本新聞社 1977)、『漂着物事典』(朝日新聞社 1990)、『浜辺の民俗学』(新潮社 1992)、『新編漂着物事典 ―海からのメッセージ―』(海鳥社 1999)など。

②

高橋裕臣 / オフィスH17代表
テレビ番組 リサーチャー

1947年東京都生まれ。テレビ番組を企画制作するためのリサーチ会社「オフィスH17」代表。大学生の頃、偶然見ていたテレビ番組に瞽女(ごぜ)の映像があり、問い合わせたことがきっかけで番組制作に関わるようになった。既存のテレビ番組や新聞や雑誌を徹底的にチェックするリサーチ法で番組制作を陰で支えてきた。近年、インターネット検索の一般化と番組制作費の激減に伴い、リサーチのみに特化した会社運営は苦境にあるが、クイズ番組、情報番組制作などで培われた独自のリサーチや情報の裏取りの手法などに関してインタビューさせていただいた。

③

高山明 / Port B
演出家

1969年埼玉県生まれ。早稲田大学文学部哲学科を飛び出し、ドイツでの演劇修行を経て、日本帰国後にPort Bを結成。高島平を舞台にした「Museum: Zero Hour」でフィールドワークをベースにした作品制作に本格的に取り組みはじめる。当初は舞台上で作品を発表していたが、現在は主にツアー・パフォーマンスや劇場の外で展開されるプロジェクトによって、現実の都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化。都市の複層的な時間、言語、社会を問い、現代演劇の可能性を拡張する試みとして、国内外の演劇フェスティバルや美術展で大きな注目を集めている。

⑤

宮本常一 / 周防大島文化交流センターなど
民俗学者

1907年山口県大島郡周防大島生まれ。29年大阪府天王寺師範学校卒業後、小学校教諭となる。柳田國男の影響もあり民俗学の道へ入り、その後渋沢敬三と出会いアチックミューゼアムに入所。生涯の多くを旅に費やして全国各地をめぐりあるき、民衆の生活を記録しつづける。1965年より武蔵野美術大学で教鞭を執り、講義はいつも立ち見がでる程の人気だったそうだ。学生や若い研究者と「生活文化研究会」「日本観光文化研究所」の活動を行い後進の育成に。その他佐渡島「鬼太鼓座」の設立に協力したり、「周防猿まわしの会」を復活させるなど、地元の人々との対話を重ねコンサルタント的活動も行なっていた。81年死去(73歳)。著書には『忘れられた日本人』(未來社 1960/岩波文庫 1984)『日本残酷物語』(監修 平凡社 1959)など、『宮本常一著作集』(未來社 1967-)は未だに刊行され続けている。

⑩

川瀬慈
映像人類学者

1977年岐阜県生まれ。エチオピアの吟遊詩人や楽師、憑依儀礼等に関する人類学研究をベースに民族誌映画の制作に取り組み、国内外の大学で教鞭をとる。"文化の記録・研究"という人類学的な命題とオーディオヴィジュアルの"物語りにおける表現"の動的均衡を図ることをテーマにしている。国立民族学博物館助教。ハンブルグ大学客員教授(2013)、ブレーメン大学客員教授(2014-現)。代表作『Room 11, Ethiopia Hotel』では従来の観察型民族誌映画の在り方に対し、撮影者と被写体による"コミュニケーション、コラボレーションの証"としての映画的話法を提示し、2008年サルデーニャ国際民族誌映画祭においてPremioper il film piu innovativo(最も革新的な映画賞)を受賞。

⑨

林周作
郷土菓子研究家

1988年京都府生まれ。調理学校で西洋料理を学ぶ。料理店やパン屋に勤務する中、日本では味わうことのできない世界の郷土菓子に興味を持ち始める。2010年、3ヶ月ヨーロッパの郷土菓子を食べ歩く。翌年フランスへ渡り、菓子屋に勤務した後、「日本まで帰れる自転車をください」と購入した自転車でユーラシア大陸を移動し32か国で200種類以上の菓子を食す。旅のはじめから「Pastry Times」という郷土菓子専門フリーペーパーを発刊し配布する。2014年にそれらをもとにした『THE PASTRY COLLECTION』(KADOKAWA/エンターブレイン 2014)が出版された。著書をきっかけにひとりでも多くの人に現地で郷土菓子を食べてほしいと語る。

⑥

工藤員功
竹民具研究者

1945年北海道生まれ。武蔵野美術短期大学芸能デザイン学科専攻修了。宮本常一指導の下で、民具の調査収集に従事。1989年より、武蔵野美術大学美術資料図書館民俗資料室専門職。現在、武蔵野美術大学非常勤講師、柏市文化財保護委員。主要著書に『暮しの中の竹とわら』(日本観光文化研究所、ぎょうせい 1982)、『絵引民具の事典』(共編著、河出書房新社 2008)等がある。今回は武蔵野美術大学民俗資料室にて宮本常一さんとの活動についてお話を聞かせていただいた。

①

原田マハ
小説家

東京都生まれ。関西学院大学文学部日本文学科および早稲田大学第二文学部美術史科卒業。マリムラ美術館、伊藤忠商事を経て、森ビル森美術館設立準備室在籍時、ニューヨーク近代美術館に派遣され同館にて勤務。その後フリーのキュレーター、カルチャーライターとして活動。2005年『カフーを待ちわびて』(宝島社 2008)でデビュー、その後映画化される。最新作『太陽の棘』(文藝春秋 2014)は、戦後すぐの沖縄が舞台でニシムイ美術村で暮らす沖縄の画家と進駐軍のアメリカ人医師の交流の物語。その他の著作に『楽園のカンヴァス』(新潮社 2012)、『ジヴェルニーの食卓』(集英社 2013)など。最近では"アート"をテーマに意欲的に小説を書き続けている。

報告会「旅するリサーチラボラトリー　–フィールドワークと表現 –」
2014年8月10日（日）14:30-16:30
東京文化発信プロジェクトROOM302
東京都千代田区外神田6-11-14

〈舞台の上、向かって左から森、mamoru、下道、丸山、と立って並ぶ〉

司会：大変ながらお待たせしました。これより、Tokyo Art Research Lab「旅するリサーチ・ラボラトリー –フィールドワークと表現 –」の報告会をはじめたいと思います。まずはじめに、東京文化発信プロジェクト室、東京アートポイント計画ディレクターの森司より、プロジェクトの経緯を説明いたします。

森司（以下、森）：こんにちは、お越し頂きありがとうございます。このあと、みなさんに成果報告を聞いて頂くのですが、僕から「なぜこのプロジェクトをはじめたのか」について説明したいと思います。

最初は、今日プレゼンをしてくれるmamoruさんというアーティストに出会ったことがきっかけです。彼の作品のつくりかたは「俺はこういう表現をしたい」というものではなくて、ある街をリサーチして、その成果を表現にするために、すごく悪戦苦闘している感じがしたんです。このmamoruさんのアーティストとしてのあり方を、僕はすごく気に入っちゃった。

mamoruさんのリサーチには方法論があるわけじゃなくて、興味・関心ある対象に寄り添って、その正体が何かを見る／知ることを重要視しています。さらにそのリサーチの成果をもう一度「加工」して表現しようと試みる。

ある時、mamoruさんは「耳は聞くことを練習するんだ」と仰っていて、「日常の為の練習曲／ etude for everyday life」という作品もつくっているのですが、そのmamoruさんの言葉を聞いて、我々は耳で聞くことをもっと練習したほうがいい、と思ったんですね。僕は現代美術に関わっているので「目で見る」ことをそれなりに訓練してはいるんですが、聞くことを丁寧に考えているアーティストがいるんだなぁ、と感心したものです。

それで今回、mamoruさんと下道基行さんが東京都歴史文化財団の別のプログラムで、かつて一緒に仕事をしたことがあることを知って、それなら一緒に「リサーチ」について考えてもらったら面白いんじゃないかな。それを僕は勝手に「日と耳のエチュード（練習曲）」と名付けています。リサーチの成果として作品を発表する、その方法論をよく考えてみたいと思ったし、彼らのリサーチをベースにした新しい表現に出会ってみたかったからです。

最後に、Tokyo Art Reserch Labのことを一言だけ。既存の方法論ではなくて新しい方法論を探し表現していくこと。そして新しい価値を生み出す実験の場だと思っています。今回も「新しい表現」のための一つの実験だと考えています。では、mamoruさんお願いします。

〈森、舞台を降りて席につく〉

mamoru：ありがとうございます。ご紹介頂きましたmamoruと申します。僕はサウンド・アーティストとして、音を扱った作品をつくっています。

森さんとは、2013年に開催された「十和田奥入瀬芸術祭」で出会いました。これは青森県にある十和田湖やその周辺のエリアを舞台にした芸術祭だったんですが、僕は十和田湖に関するリサーチと音のフィールドワークを行ない、その結果をもとにして「湖とその盆覆艦のためのコンポジション」というタイトルで一時間ほどの湖上遊覧、船内で流されるアナウンスとプログラムのためのテキストをつくり発表しました。

僕は作品をつくるときに、リスニングメモをとっているんです。たとえばやのこの部屋の環境をメモするよ、「プロジェクターの音がして……」「PCを立ち上げる音が聞こえて……」となります。こういった音の風景をメモして、テキストにまとめあげていき、そこから作品が展開していくんですね。

森さんから「何かやらない？」と言われたとき、まず非常にありがたい お話だなと思いました。そのときに「次につくりたい作品のイメージはあるの？」とも聞かれました。正直に言うと「あるにはあるけれども、リサーチして作品を書き起こしていく、その方法論をもう少し深く考えたい。そのための時間がとれたら一番 future いです」と答えました。そこで、リサーチの方法論を一緒に考える人を探すことになりました。今、隣にいる下道くんです。

下道基行（以下、下道）：とーい、う事らしいです、はい。下道基行といいます。僕は写真を撮ったり、旅をしながら色々なものを探して作品をつくっています。例えば、2006年からはじめて2012年に完成した、日本の国境線の外側を旅しながら植民地時代の島居を探していく「torii」というシリーズがあります。その他に、僕の祖父が絵を描いて色々な人にあげて、その絵の飾られている風景と記憶を探しに行く「日曜画家」というリサーチなどがあります。

mamoruくんから相談を受けて、三人でミーティングをした際、森さんから「日と耳のエチュード」というお話が出てきて、「それはおもしろい！」と思いました。でも「エチュードは、mamoruくんがアーティストとしてずっと追求してきたテーマなので「エチュードじゃないフレームってないかな？」と思いました。はじめは10人くらいの受講生と一緒に、体験して学んで、最後に何かをつくれたらと思いました。「日と耳のワークショップ」のような……色々な話はあったのですがまとまらず、結局、森さんから「お客さんと一緒に何かをつくるのではなく、自分たちでリサーチする、その フレームでだけでもいい。TARL（Tokyo Art Research Lab の略）には講座だけじゃなくて、研究開発という枠もあるんだよ」と言われて。

mamoru：研究開発というフレームだと、開発したものを成果として見せないといけない。でも僕らはもしろ、自分たちの「インプット」の仕方をもっと考えてみたかった。「リサーチのためのリサーチ」という言葉を、はじめの頃は使っていた。

下道：うん、つまり、リサーチをしている人たちがどういうことを考えて、実際にどういうリサーチをして、最後にどのような編集やアウトプットをしているのか、ということをテーマに、自分たちと違うフィールドで表現している人に会いに行ってみようと。

mamoru：色々な人にインタビューをするとして、それを最終的にどういうかたち（報告書）にするのか……それも重要。それな意味的なまま、デザイナーの丸山くんに声をかけたんです。（笑）

丸山晶裏（以下、丸山）：デザイナーの丸山です。東京の外れのほうにある国立市の、さらに外れの谷保というところで、建築家たちと一緒に「やほろじ」というコミュニティを立ち上げて、そこの運営をしながら、デザイン事務所をやっています。他にも個人でギャラリーと書店の運営をしています。もともとmamoruさんと下道さんとは府中市美術館で一緒にトークショーをさせて頂いたことがあり、今回それが縁で声をかけてもらいました。

（照明がスポットに。スクリーンにタイトルが出る）

《リサーチと収集法》

mamoru：まず、旅のプロセス自体が僕らにとって、非常に意味のあるものでした。今回はそのプロセスで見えてきたトピックとして、「リサーチと収集法」「お礼と作法」「アウトプットと表現」という上についてお話してみようと思います。今から話す内容は、「すでに編集されたもの」として受け止めて頂けたらと思います。

一般的にフィールドワークは「現地調査」という意味で捉えられます。研究対象となる社会や地域に赴き、その土地に暮らす人々にインタビュー調査し、自分自身も同じ経験をすることを通じて生活や社会の仕組み、その土地ならではの考え方の枠組みを理解しようとする社会調査の手法です。こうした調査方法は 20 世紀初頭に文化人類学の方法として誕生して、その後社会学、民族学／民俗学、地理学など幅広い分野で用いられるようになったと言われています。

フィールドワークの結果、書かれたものを「民族誌」（エスノグラフィー）と呼びますが、「フィールドワークの技法」（新曜社 2002）の中で佐藤郁哉氏が「民族誌というのは、ほんらい旅行記、ルポルタージュ、学術文献、小説などさまざまなジャンルの文章の特徴をあわせもつ混成ジャンルの文章であり、文学と科学という二つの領域にまたがる性格をもっているのです」と書いている通り、もともとジャンルをまたがる性格を持つフィールドワーク的な手法は、今では学術的な枠も超えてアートやその他の現場でも使われていて、僕達もその一端だと思うし、他にもそういう人達はいるだろうと。

下道：以前は現代アートの作家はアトリエなどで制作する事が一般的なイメージだった。ただ、日本では特に2000年以降、地方での芸術祭や滞在制作が増え、フィールドワークという言葉を急に目にするようになってきた気がします。

今回は、僕らなりに接触する他のジャンルから学びながら、さらに“研究者”や“現代美術作家”でもない職業の人々のフィールドワークと表現を探ろうと考えたのです。けれど少し大きく掲げ過ぎましたかね（笑）。とにかく色々な方から調査や編集の極意を学ぼうと。

丸山：さて、東京にお二人が尽って来て最初に会った方からいきましょうか。テレビ番組のリサーチをされている「オフィス HIT」の社長、高橋裕臣さん、ですよね。テレビ番組制作の背景で、色々なリサーチをされているというお話からはじまったかと思います。高橋さんは、表現者ではなく根っからのリサーチャーですね。

〈ノロ、スクリーンに取材時の写真を写す〉

下道：高橋さんは大学生の頃に替友（ゴゼ／日本各地にかつて存在した盲目の女性芸能者）に興味を持ち調査を行なっていたそうで、元々民俗学的関心の強い方という印象を受けました。普段電車に乗っている時に、吊り広告などを眺めるのもリサーチの一環だと仰っていました。若者や お年寄りなどの間で流行っているものを観察したりすることも必要で、街を歩いていても何かとチェックしているそうです。それって、ちょっと考現学的かもしれないけど、ただその目線が違う。テレビ番組になるかどうか、が判断の基準だから。

丸山：日常で目に入るものすべてがリサーチ対象といった感じですね。

下道：高橋さんのフィールドであるテレビ番組制作のリサーチでの「収集法」の話をすると、日本中の面白いネタをたくさん集めてきて、「うちの町にはこんなのがある」みたいな発表をする番組があり、小学生から大人まで幅広い視聴者から情報が寄せられるのですが、同時に何社かリサーチ会社が日本中の情報を探して番組制作を支えていたようです。具体的なリサーチの方法としては、日本中の新聞、雑誌、テレビ番組を、分担して「できるかぎりですべてを見る」と話されていたのが印象的でした。そこから本当になりそうなものを探して、あれは会議にあげて、そこから番組をつくっていく。それは個人ではなくテレビ番組だからこそできたことかもしれませんが。

――――――――　できる限りすべて集めてみること

mamoru：そういえば、宮本常一さん関連の資料館を訪ねた時にも、「全部集めなさい」という言葉が何度も出てましたよね？

下道：そうそう。たとえば民具だったら、「同じ形でも少しでも違う部分があれば、全部集める」という具合に。やはりそれは収集の基本かも。でも難しいですよね。

宮本さんが武蔵野美術大学で教鞭を取られていたら、生活文化研究会というのを学生さんたちやっていて、その時から民具の収集を一緒に行なっていた工藤さんは、ある地域に民俗資料館をつくった時「2万点くらいは集めなさい」と宮本さんから言われたそうです。そのくらい集めると体系づけられるというのが宮本さんの中にあったのでしょうね。これは経験からくるアウトプットへの編集感覚かもしれません。

あと、漂着物の研究家の石井さん。この方は「新編漂着物事典」（海鳥社 1999）という本で知ったのですが、これがすばらしいんです。色々な漂着物が収集され辞典になっている。さらに、石井さんご本人がものすごくエディティングにそれらの漂着物についての説明を書かれていて、これがまた面白い。石井さんの家は浜辺から少しの所にあって、浜辺の約 50km を 15km 余×20km で区切って2、3ヶ月歩き通す、これをひたすら繰り返していたらしいんです。本が出たときすでに「三十年の集大成」と書かれていたので……、相当長くやっておられるご様子。

mamoru：高橋さんの話でもう一つ印象的だったのは、「クイズ番組の“正解”は実は難しい」ということ。テレビなので色々な視聴者が見ていて、正解が間違っていたり曖昧だと、クレームが出ることもあるそうです。そのためにコメンテーターという装置をとるという話が、僕は印象に残っています。

例えばかつて「蟹の足歳は耳が立っているからどうやって判断する」という話があって、でも耳がしゅんと垂れている種類の蟹が登場して、「それは違うんじゃないか」というクレームがあった、と。

そういう「正解」の裏の取り方としては、“その道の権威に意見を聞く”そうです。権威とは、研究者やそのトピックに関して本を出している人や、その分野でできるだけ一番詳しい人、かつ権威のある人のことです。

――――――――　できる限り一番詳しい人の言葉を得る

mamoru：他にも、サッポロ堂書店とマツノ書店さんにお話を聞いたときに面白かったのは、「この本の量見てよ、こんなの全部を読めるわけないですよ」と言われて「そりゃそうだよな」と思いつつ、「あ、読んでないんだ」と結構ショックだったんです（笑）。じゃあ「どうやって本の価値を判断し、どの本を複製していくのか」と聞いたら「よく知っている人に聞けばわかるから」とあっさり言われたんです。もちろん長年の経験からも判断されているのですが、これは真実で、何かを調べるとき、やっぱり詳しい人に話を聞きにいくのが一番なんだな、と印象に残りました。

下道：「すべて集める」とか「一番詳しい人に聞く」とか、当たり前の事だけど、重要なリサーチの基礎なのかも。

mamoru：そのとき開催していた府中市美術館のグループ展のビジュアルを担当していて、すごく限られた予算でデザイナーとしての力を発揮していたんです。だから……。

下道：この混沌とした状況ごと、一緒に付き合って欲しいなぁ、と思いました。（笑）

丸山：なるべくデザイナーとして現場に立ち会って欲しいと言われたんですが、自分のお店の運営もあったので、全部は無理だなと。会いに行く人のリストを見ると東京以外に、関西や中国地方もあったりして。

そのリストを見た時に、点と点ではなく、それらを線にして、「一つの旅にしちゃえばいいじゃん」って思ったんです。最終成果物をイメージしながら考えていたこともあって、全体のリサーチを一つの旅としてとらえると面白いんじゃないかと。

下道：僕らも、「それいいじゃん（笑）」って。

mamoru：それで、普段自分たちと関わらないような、アーティストとしてではなく何かを生み出している人たちも話ができたらいいなと思っていたので、取材先のバラエティを出したいと思いました。そこで、一緒に旅するメンバーを増やして、その人たちの意見も取り入れようと思い、メンバー募集をかけたんです。

下道：はじめての面接官体験みたいな（笑）

mamoru：そんなことに興味を持っている人がいるってことを知るのも面白そうだし、とにかく募集してみようと。

下道：すると結構な人数の方々が来てくださったんです。

〈mamoru、下道、丸山が、舞台を降りて席に着く〉

〈照明がスポットになり、急に面接シーンの再現になる〉

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか？

mamoru：はい、どうぞ。

〈ノックの音〉

〈加藤、Dアを開けて隣室から入ってくる〉

加藤和也（以下、加藤）：どうもはじめまして。

一同：はじめまして。

〈加藤、照明を浴び、お客さんに向かって話し始める〉

加藤：どうも、加藤和也と申します。あだ名が「ノロ」なので、多分このあとの会話でも「ノロ」と呼ばれると思うので、よろしくお願いします。

下道さんとは、もともと知り合いだったので、ちょっと「久すぎいな」と思いながら面接を受けていました。

僕は「FAIFAI」という演劇チームについて、主に記録写真や映像、Web 制作などを手掛けています。

このプロジェクトに応募した動機は、「FAIFAI」で、舞台作品をつくっていると、その過程で残らないモノが多くて、ここ最近、その過程もちゃんと残しておきたいと考えていました。もともと舞台裏など、メイキング的な部分が好きだということもあって、今回のリサーチラボに参加して、リサーチの裏側を記録したりアーカイブについて考える機会を得たいと思い、参加しました。

〈加藤、着席する〉

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか？

mamoru：はい、どうぞ。

〈山崎、Dアを開けて入ってくる。同様に話し始める〉

山崎阿弥（以下、山崎）：はじめまして。山崎阿弥です。私は声のアーティストで、造形・映像作家でもあります。いま二つの作品づくりが進行しています。一つは「事実の羅列だけでその人を表現できないか」をテーマにある方の 30 年分の年譜を作成し作品化すること。もう一つはオノ・ヨーコの過去のパフォーマンス作品をモチーフにフィクションの映画をつくることです。どちらも過去に起こった“事実”から作品化する・フィクション化するという試みですが、最初の発想を作品に活かすのが難しくて……。そのタイミングで猿寸前のことを知りました。旅という言葉自体にもひかれましたが、場所が変わればインプットも変わるし、インプットが変われば アウトプットも変わるだろうと、と思ったんです。

また、新聞記者をやったり、シンクタンクで調査やインタビューの仕事をしてきた経験もあったので、もしチームに入れなくても何かお手伝いできることがあるかなと思いました。特技は知らない人から物をもらうことです。米一俵とか、ねぎ十本とか。お金を払わないと入れないようなところで、誰かが払ってくれたりとか。

〈山崎、着席する〉

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか？

mamoru：はい、どうぞ。

〈ジョイス、同様に入り話し始める〉

Joyce Lam（以下、ジョイス）：ジョイス・ラムと申します。出身は香港ですけれど、今は日本の大学院でアートプロジェクトについて研究しています。アーティストが地域に入って、その土地のことを調べ、作品をつくって、それがどのように人が移動するきっかけになっているのかというテーマに取り組んでいます。所属している研究室で学術以外にも、さまざまな人がどのようなリサーチをしているのか、もっと知りたいのと、旅という言葉にもひかれて応募しました。

〈ジョイス、着席する〉

〈フラットな照明に戻る〉

下道：……とまぁ、こんな感じで、予想以上にたくさんの方が来られて、しかも色々な特技のある方、魅力的な方がいらっしゃいました。はじめ、実は四人乗りの車を僕と丸ちゃんが持っていたので、あと一人だけ募集するつもりだったんです。それで「記録」は今回とても重要な要素だと思っていたので、そこに強い思い入れがある人という事でノロが採用となったのですが……

mamoru：そうなると、まあ見てくださいよ。一、二、三、四人……と男ばっかり。

下道：二人の女性に対してそういう意味で選んだのではないのですが、男が四人で色々な人に話を聞きに行くっていうのも、はっきり言って来られる側もむさ苦しいだろうと思いまして。

mamoru：色々なところに取材に行った経験からも、女性がいるのと、いないのとでは、話を聞き出すタイミングやアポをとる早さが変わってくるんですよ。そこで何とか人を増やせないのかな、というのがありました。

下道：そしたら「レンタカーで六人乗れる車にしたらいいじゃないか」というアイデアが天から降ってきた（笑）、そして彼女たちを選びました。

mamoru：予算の組み替えもやりました。具体的には宿の予算を削ったりして、工夫すればなんとかなるだろう、と。

下道：面接が終わり、メンバーが決まりました。ここから旅がはじまります。

〈下道、地図が映し出された舞台上スクリーンに歩み寄る〉

下道：まず、面接の翌日から、僕はまず一人で沖縄に滞在制作をしに行くことになっていて、小渕家の原田マハさん（裏面①参照）にインタビューを行ないました。最近、彼女は戦後すぐの沖縄を舞台にした小説を書かれていて、史実のリサーチからフィクションをつくるお話を聞きたいと思いました。

〈mamoru、地図が映し出された舞台上スクリーンに歩み寄る〉

mamoru：僕は面接の翌日から自分の作品のリサーチのために北海道へ向かいました。北海道開拓やアイヌの文化にまつわる研究者の方達に会う機会が多かったので彼らのリサーチ手法などを聞いたりしていたのですが、「北方資料ならここ」と教わられて「サッポロ堂書店」という古書店を訪ねました。店主の石原誠さんから得意分野が一目でわかる1冊の世界、年3、4タイトルを新刊で出版してきたお話しなどを伺いました。

下道：僕らが東京に戻って来て 6 人揃って、まず東京を中心に会いに行ける方に会いに行ってみようということで、6月28日に高橋裕臣さん（裏面②参照）にお会いしました。この方はテレビ番組の制作に携わるリサーチ会社［オフィス HIT］の社長さんです。こさっていうリサーチ会社というのは、番組制作に必要な情報収集をするリサーチのプロです。

mamoru：その次の日、PortBという演劇ユニットの富田亜紀子さん（裏面③参照）にお会いしました。もうだいぶ、横浜トリエンナーレで新作も発表されていますが、様々な土地で歴史的な部分にも触れながらリサーチベースで作品を大規模に展開されている作家さんです。

次に大大大先輩のフィールドワークとして民族音楽学者の小泉文夫さん（裏面④参照）の、東京藝術大学の中にある資料室を訪れて、彼がどういうふうにフィールドワークしていたのかということを聞いてきました。

下道：もう一人の大大大先輩という事で、民俗学者の宮本常一さん（裏面⑤参照）に関わる資料や実際に収集された民具を見学に武蔵野美術大学民俗資料室を訪れ、後日同じ場所で竹沢具研究の工藤員功さん（裏面⑥参照）から お話を伺いました。

mamoru：そしていよいよ7月24日、「山口でこの宿とったから現地集合」という感じで、9日間メンバー全員での旅がはじまりました。

下道：翌日25日に車を借り、古書店であり小規模出版をやられているマツノ書店二代目の松村久さん（裏面⑦参照）という方に会いに行きました。この方は明治維新関連の絶版出版物の復刻出版を小規模ながら地方発信で行なっていることに興味を持ちました。

それから、その日の午後に周防大島に渡りました。そこは宮本常一さんの出身地ですので、周防大島文化交流センターと久賀歴史民俗資料館というところで、宮本常一さんと一緒に民具を集めたり、調査をされていた方に会いました。

mamoru：その日は、民俗学の大家の足跡を辿るような充実した日でしたね。次に広島に向かい、広島市現代美術館のチーフキュレーターをされている神谷幸江さん（裏面⑧参照）に会いに行きました。キュレーターとしてのリサーチ、そしてリサーチベースで制作しているアーティストとかなり深くお仕事をされていると聞いていたので、お話を伺って来ました。

下道：その後、“食”のフィールドワークから何か表現をしている方を全員で探し、声を掛けていたのですが、スケジュールがあわなかったので、調整しながらの移動と

なりました。“食”で探していた理由としては、以前旅行中に麺類を食べ歩いて最終的に日本でラーメン屋か何かを始めたいという旅人と出会ったことがあったからです。そういうのもフィールドワークと表現ではないか、と。

mamoru：京都でそういう方がいて会えそうだけど、連絡がなかなか繋がらなかったのですが、思い切って京都まで行ってしまおうと、6時間かけて行きました。あとあと考えると雑談も含めて、この長い車での移動の時間が編集会議となり、ここで何かが生まれていくというのが、面白かったです。最初は宿でミーティングをするのかなと思っていたし、そういうふうに設定もしていたんですが、実は車の中が一番密度が高いということがわかってきた6時間でした。

京都では残念なことにその方に会えなかったので、兵庫県淡路島に移動しました。そこで、無人野菜直売箱を探して地図をつくっているグループに出会いました。

山崎：その後、京都で会えなかった方と連絡がとれまして、淡路島からも1回京都に戻ったんです。瞬ユ太郎子研究家の林周作さん（裏面⑨参照）です。この方は 1988 年生まれで、ご自身でお菓子をつくったりもできるんですけれど、ユーラシア大陸に自転車で移動して 32 ヶ月 200 種類のお菓子を食べてこられたんです。

その後、大阪で国立民族学博物館の助教で映像人類学者の川瀬慈さん（裏面⑩参照）にお話を伺いました。

mamoru：川瀬さんは、エチオピアで研究、映像制作をされているんですが、民族でお話を聞かせて頂いた後、川瀬さんもお連れして、「あいの り」みたいに「誰が降りるんだ」なんて冗談を言いながら大阪府堺市の宿に移りました。そして宿の数軒隣りにあるカレー屋「ヌンケイ」に行き、美味しいカレーを頂き、カレーのレシピ習得を目的にこれまでインドやタンザニアに旅をしたという店主の町野珠美さんにお話を伺いました。

山崎：本当は大阪でレンタカーを乗り捨てようということになっていたんですが、車で移動中に話をすると、色々な発見があるということに気がついて、このまま長野まで行ってしまおうとなって。

ジョイス：長野に移動して、雑誌［Spectator］の編集長、青野利光さん（裏面⑪参照）に取材させて頂きました。［Spectator］は、三人という少人数で編集され、毎回特集を企画し取材を重ね、1年に3号ずつ、現在までで30号出版されている雑誌です。

mamoru：最後に、長野県に本店を構える、丸山珈琲というスペシャルティコーヒーで有名なお店がありまして、世界中を飛び回ってコーヒー豆を買い付けておられるという社長さんに取材できないかなと思ってだいぶ粘ってコンタクトをとっていたんですが、残念ながらお忙しいとの事で、お会いできませんでした。でも、旅の最後をおいしいコーヒーでしめるのは悪くないな」なんて言いながら帰ることになりました。

そして、車をここで乗り捨てようということになりましたが、ここまで来たら車で帰ろうということで新宿まで帰ってきました。その時点で走行距離が1856km。

下道：車中でよく話しましたよね、色々なことを。で、帰ってみると……。

山崎：取材ができなかった丸山珈琲の広報の方から「取材 OK です」という電話が入り、トークの2日前、8月8日に西麻布店で丸山健太郎さん（裏面⑫参照）にたっぷり2時間お話を聞くことができました。

mamoru：その頃……。

下道：はい、下道は展示の搬入があってまたまた山口に帰っており、山口まで行けるならぜひ会いたい方がいて。それが初代漂着物学会の会長の有井忠さん（裏面⑬参照）。日本で一番漂着物に詳しい方です。ボトルレターも何本も拾っているすごい人で、ぜひお会いして話しを聞きたいと思って福岡まで行きました。石井さんのご自宅は漂着物の博物館のような 数々の資料の集積場所でした。

mamoru：まだ終わったという感じもしないのですが、僕らの 2ヶ月はそういう旅でした。

下道：お一人ずつをきちんと紹介して、その感動を伝えたいくらい面白い方たちだったのですが、10 人以上の方々となると限られた時間内ではそれだけでパンクしてしまうので、ざっと経緯をご紹介しようというのがこの前半なんです。

はじめは「インタビュー本をつくろう」というアイデアもあったんですが、「フィールドワークと表現」というタイトルをつけると、「なぜこのタイトルでこの人選なのだ?」と批判もあるだろうと想像できましたし、どっちにしろインタビュー本としては網羅なんてできないのではというお安もあり……ぐんなとき、車の中での会話がヒントになりました。「そう言えばさっきインタビューした方のこういう話が面白かった」「だったらあの人のあの話と近いね」「それだったら……」と、内容が混線していく感じが面白いなぁと思い、一回インタビューした事をそれぞれで反芻して、並べてみて、分類し、新しくカテゴリーをつくり、並び替えてみようと。それが今から行なう後半のトークです。

mamoru：一回ここで休憩しますが、会場の後ろに旅で会った方々の著作もありますので、良かったら手に取ってみて下さい。その他に手書きのノート（蛇腹の冊子として発行）があります。僕らはそれを 1 冊と呼んでいるんですが、宿でミーティングをした時などに今日何があったかということを時系列にした行動記録と、雑談やその日の出来事から考えたことなどが書き込まれています。ご興味あればそちらもあわせて読んでみて下さい。

《アウトプットと表現》

mamoru：さて、「リサーチと収集」「お礼と作法」ときて、最後は「アウトプットと表現」についてお話したいと思います。

まず高橋さん、「私の場合はリサーチ自体が目的です。表現ではないです」と仰っていました。確かに、何が“表現”と呼べるのかという問題はありますが、リサーチし、収集された物たちは、それぞれの感覚で編集されて、人の目に触れている思うんです。だからこそには、アウトプットするための編集の意識を中心に考えたいと思います。

山崎：そういえば、下道さんが写真を発表するひとつのきっかけが、雑誌［Spectator］の「WANTED ／君の記事を求む」というページで読者から記事を募集していて、そこに持ち込んだことだったとか。

下道：そう、雑誌に記事を載せて沢山の人に見て欲しいなぁと思っていたので。2003 年にその記事を発見して、直接電話して、編集長の青野さんに会いに行ったんですね。「こういうのを最近見つけたんで、面白いから記事にしたい」と。すると「うん。連載にしてみよう」と。この雑誌は、自分の手で新しい世界を見つけてきて人に表現させる、ページというか余白を持っている。2 年間で 4 回だけでしたが、初めて記事を書いてお金をもらいました。すごくうれしかったですね。

僕はここで学校とは違う多くの事を学ばせてもらいました。少し遠かもしれませんが、若い作家の学ぶ場所として、宮本さんが作られた旅の月刊誌『あるくみるきく』（日本観光文化研究所、1967-88）は、記事もプロのライターさんに依頼するのではなく、若い研究者や学生が旅の成果を発表できる場所だった。記事を書くとギャラもあったそうです。インプットとアウトプットのプラットホームとしての雑誌っていいよね。

――――――――　記録と表現

山崎：表現というと、川瀬さんから出た、非常に印象的な言葉があった。それが「記録と表現の動的均衡」。

下道：簡単に言うと「記録と表現とのバランス」かな。川瀬さんは映像人類学者なので、文化を記録することは最も重要な仕事だと思います。例えば、ある集落で人々が歌っているとき、その歌は消えていかし、記録しておく、これは映像人類学というフィールドの大前提。ただ、当分野での従来の記録方法は、まず三脚を立ててカメラが動かないよう固定する。そして、撮影者／調査者の存在を消した て、対象を読々と観察し、記録するというスタイルでした。それによってフラットで、「客観的な」記録が可能になると、信じられていたんです。でもやっぱり、そこにカメラがあるし、自分は対象の社会に介入してる。川瀬さんは、映像から消し去ることができない己の存在を逆手にとって、対象の世界に自らがぐっと入り込んだ文化の表象方法を探求してきた と仰っていましたね。

mamoru：民族学の前世代の人たちは「透明人間」という言葉を信じていた と。でもそんなわけはなくて、そこにあなたはいる……。

下道：「記録と表現の動的均衡」ってやっぱり面白い言葉だなぁ。カメラや文字や記録媒体を持つ作家は、いつもぶつかる壁かもしれない。青野さんが『Spectator』で実践しているニュージャーナリズムというのがあって、1960 年代にアメリカで始まった新しいジャーナリズムのスタイルなのですが、これはベトナム戦争の時、ジャーナリズムの客観的な手法に行き詰まりを感じた人たちが、客観性を捨て主体的に書き始めたスタイルなんです。

そういえば、宮本常一さんの『忘れられた日本人』（未来社、1960 ／岩波文庫、1984）という素晴らしい本も 1960 年発行です。宮本さんは民俗学者なので、高度経済成長期にどんどん捨てられていく「過去から繋がる人々の生活」を目の前にして、残さなきゃという気持ちで動いていたのだと想像します。だ、宮本さんの面白いところは、記録された言葉がものすごく美しいんです。読む人の想像力を飛躍させるところに、記録を超えたなにかがある。もしかすると、このあたりは、同じ問題と表現に触れていて溜滅の一部かもしれない。

山崎：宮本常一は民俗学の中では柳田國男と比較されて、異端児みたいにみなされることもありますが……。

下道：「あそこに書かれたのは事実じゃない」と言われることもありますが、それは記録と表現のバランス感だと思う。どこまで自分が記録し、どこまで表現に挑戦するか。

mamoru：川瀬さんの懲度でいうと、コミュニティに介入していったときの自分の存在を、「おい、川瀬」みたいに字意として確信犯的に残している。実際に、そこにも文化のあり方が映像化されている、映像を見た人達の反応さえもその文化が もたらすものだ、という意識が感じられました。

山崎：ロックミュージシャンのコール＆レスポンスじゃないですが、そのやりとりの中で表現したい……。

mamoru：「僕が愛してる文化はそこにある」と仰っていました。そこでしか表象し得ないものに愛を感じておられる、僕は表現者の懲度としてものすごく共鳴するものを感じました。

山崎：映像に対する視聴者の様々な反応を、撮影／調査対象のさらなる理解に役立てて、世界を読み解いていくことを重視していると言ってましたね。

――――――――　外に開かれたアウトプット

下道：あと、研究者の論文というのに触れる機会は一般的に言って少ない気がします。小泉文夫さんは、修士論文として『日本伝統音楽の研究』（音楽之友社 1958）という素晴らしい論文を書かれていますし、それ以降も論文は発表されているのですが、同時に一般向けに書かれた書籍やレコードなどを積極的に出版されていました。

mamoru：ナイル川流域でのフィールドワークをもとにしてつくられた「ナイルの歌」（ビクター、1964）という“本とレコードの間のようなもの”を見せて頂いたのですが。これが、めちゃくちゃかっこいい。そして百科事典の様な本格的な装丁を見た瞬間に何かが分かった気がしました。カタログの様な本格的な冊子があって、歌の解説やフィールドワークの様子を伝えている、6 枚の LP はオープンリールのテープレコーダーで採音してきた音源が元になっている。

下道：フィールドノートや写真が入っていたりして、たくさんの人に届けることの意義を強く感じました。もちろん論文も人に届くものだと思いますが、もう少し投げ

方が違う。

mamoru：記録と表現でいくと、レコードにして誰かがその歌を聞くという可能性を残したことで、はじめて記録としても意味を持ったんじゃないかと思ったんです。

山崎：小泉さんは自分が社会から得たものを、もう一度社会に返そうとした人ですよね。

mamoru：論文としてガラスケースに留めるというよりは、連綿と続いている文化を生きた状態で残す。たとえばレコードにすると、僕らの想像を越えたオーディエンスが生まれる。そこに可能性を見いだしていた んじゃないかなと思いました。

下道：記録と表現のバランスでいうと、より表現寄りなのは小泉家かもしれません。原田マハさんは小説家で広く一般大衆に向けて表現されている方です。そういう点では、学者とか芸術家とも少し違うと思います。そして、取材をして史実を元にした作品もありますが、これはたぶん記録ではないですね。彼女の言葉だと「こんなことまでやって許されるⅡというフィクションの世界は、ずるいと思うけど、恵まれていると思う。研究者の論文では、ウソは絶対に許されないでしょ。フィクションの神は作者なの。ただ、責任はすべて作者が引き受けないといけない」と話されていたのが印象的でした。

この世界にもう一つ新しい世界を言葉で産み落とし、それが読み継がれていく。お話を聞きながら、すごく幸せなお仕事だなと思いました。

――――――――　そこにある物の力を信じる

山崎：郷土菓子の林さんですが、フリーペーパー「THE PASTRY TIMES」を再編集するかたちで最近本を出版されました。彼は「本とか台分の活動を通して、一人でも多くの方が現地に食べに行ってくれれば一番嬉しい」と言ってるんですよね。mamoruさんが小泉さんのレコードを聞いて、mamoruさんの中に種のようなものが植え付けられたように、誰かのリサーチが、誰かの心や体の中で革歌していく……。

下道：「トルコのお菓子を日本でつくっても、日本で食べてもらうんじゃなくて、むしろトルコで食べて欲しい」と言っていたのが印象的でした。

ジョイス：「トルコの暑い、がやがやした雰囲気の中で食べるからおいしいと思う」って。

山崎：林さんは郷土菓子を「時代の先を行く宝飾品のようなものではなく、それぞれの土地が培ってきた生きる力の溢れる存在」と書いています。

mamoru：たとえばフィールドワークをして、アート作品をつくり、どこか遠うところに持って行ったときに、どうやって見る人が自分と同じくらいの発見をしてくれるか、というところあると思うんです。それに対して、彼は明快に「現地に行って食べて欲しい」と。僕も共感しました。

下道：そうねぇ。僕が絵画ではなく写真に転向した最初の理由は、やはり目の前の風景が面白くて、自分がなるべく手を加えず「まなざし」を共有したいと思ったから。ただ、写真として切り取っている時点で、僕の手は加わっている……。川瀬さんの言う「記録と表現」のバランスですね。そのせめぎ合い。さらに、写真では僕がリアルに体験したことは切り取れるし、そこにフィクションの可能性が出てくる。

mamoru：フィクションといえば、広島市現代美術館で開催中だったドリス・サルセド展に出品されていた平面作品について。僕はてっきり巨大なインスタレーションとして作られた作品の記録写真だと思っていたんですが、キュレーターの神谷さんが「あれは全部CGなんです。写真ですさない」と仰っていました。実際の作品はあまりに大きすぎて無理に写してみせるよりも、その展示や作品を体験できなかった人々にむけてCGというフィクションを使っている、という話でした。

――――――――　バラバラにして組み直す

山崎：今の で思い出したのは、高山さんですよね。高山さんはリサーチをしてオンサイトにあったものをオフサイトに持って来ると言っていたじゃないですか。リサーチから持ち帰って来たものを、もう一度“切断”すると。

下道：「“切断”して、リフレームするのが仕事だ」と。

山崎：それでいくと、私たちのアウトプットって、この膨大なインタビューを起こして、ひと文字、ひと文字アウトプットすることなのか？　という話になりまして。実際にこの場も一つのアウトプットなんですが……。

下道：そうなんです、実はこれまでのトークは台本に基づいています。テーマを決めてアドリブで話すのではなく、旅で得たものをそれぞれ書き起こし直し、再構築し組み立てなおしてみよう、と自分たちの表現として、今回旅をしたことをどうまとめるかを考えたら、こういうかたちになったんです。

mamoru：このトークが始まるぎりぎり前まで台本を編集していましたし、いまこの状態もまさに編集中。

下道：［Spectator］の青野さんがすごく面白いことを言ってました。「ただの事実を並べたログだけでは表現にはならない」と。ログって言うのは時系列の履歴だったり記録のことです。本当にその通りで、このトークイベントもログと編集作業とを両方見せようとしています。

mamoru：つまり、これは“ライブ研究開発”なんです。

下道：さてさて、ここからは、一緒に旅をしたメンバーがそれぞれ何を受けとったのかを聞いて、まとめにしたいなと思いますが……。

（暗転）

〈加藤、

報告会「旅するリサーチラボラトリー　－フィールドワークと表現－」
2014年8月10日（日）14:30-16:30
東京文化発信プロジェクトROOM302
東京都千代田区外神田6-11-14

〈舞台の上、向かって左から森、mamoru、下道、丸山、と立って並ぶ〉

司会：大変ながらくお待たせしました。これより、Tokyo Art Reserch Lab「旅するリサーチ・ラボラトリー -フィールドワークと表現-」の報告会をはじめたいと思います。まずはじめに、東京文化発信プロジェクト室、東京アートポイント計画ディレクターの森司より、プロジェクトの経緯を説明いたします。

森司（以下、森）：こんにちは。お越し頂きありがとうございます。このあと、みなさんに成果報告を聞いて頂くのですが、僕から「なぜこのプロジェクトをはじめたのか」についてご説明したいと思います。

最初は、今日プレゼンをしてくれるmamoruさんというアーティストに出会ったことがきっかけです。彼の作品のつくりかたは「俺はこういう表現をしたい」というものではなくて、ある街をリサーチして、その成果を表現にするために、すごく悪戦苦闘している感じがしたんです。このmamoruさんのアーティストとしてのあり方を、僕はすごく気に入っちゃった。

mamoruさんのリサーチには方法論があるわけじゃなくて、興味・関心ある対象に寄り添って、その正体が何かを見る／知ることを重要視しています。さらにそのリサーチの成果をもう一度「加工」して表現しようと試みる。

ある時、mamoruさんは「耳は聞くことを練習するんだ」と仰っていて、『日常の為の練習曲／ etude for everyday life』という作品もつくっているのですが、そのmamoruさんの言葉を聞いて、我々は耳で聞くことをもっと練習したほうがいい、と思ったんですね。僕は現代美術に関わっているので「目で見る」ことをそれなりに訓練してはいるんですが、聞くことを丁寧に考えているアーティストがいるんだなぁ、と感心したものです。

それで今回、mamoruさんと下道基行さんが東京都歴史文化財団の別のプログラムで、かつて一緒に仕事をしたことがあることを知って、それなら一緒に「リサーチ」について考えてもらったら面白いんじゃないかと。それを僕は勝手に「目と耳のエチュード（練習曲）」と名付けています。リサーチの成果として作品を発表する、その方法論をよく考えてみたいと思ったし、彼らのリサーチをベースにした新しい表現に出会ってみたかったからです。

最後に、Tokyo Art Reserch Labのことを一言だけ。既存の方法論ではなくて新しい方法論を探し表現していくこと。そして新しい価値を生み出す実験の場だと思っています。今回も「新しい表現」のための一つの実験だと考えています。では、mamoruさんお願いします。

〈森、舞台を降りて席につく〉

mamoru：ありがとうございます。ご紹介頂きましたmamoruと申します。僕はサウンド・アーティストとして、音を扱った作品をつくっています。

森さんとは、2013年に開催された「十和田奥入瀬芸術祭」で出会いました。これは青森県にある十和田湖やその周辺のエリアを舞台にした芸術祭だったんですが、僕は十和田湖に関するリサーチと音のフィールドワークを行ない、その結果をもとにして「湖とその遊覧船のためのコンポジション」というタイトルで一時間ほどの湖上遊覧、船内で流されるアナウンスとプログラムのためのテキストをつくり発表しました。

僕は作品をつくるときに、リスニングメモをとっているんです。たとえば今のこの部屋の環境をメモすると、「プロジェクターの音がして……」「PCを立ち上げる音が聞こえて……」となります。こういった音の風景をメモして、テキストにまとめあげていき、そこから作品が展開していくんですね。

森さんから「何かやらない?」と言われたとき、まず非常にありがたいお話だなと思いました。そのときに「次につくりたい作品のイメージはあるの?」とも聞かれました。正直に言うと「あるにはあるけれども、リサーチして作品を書き起こしていく、その方法論をもう少し深く考えたい。そのための時間がとれたら一番うれしいです」と答えました。そこで、リサーチの方法論を一緒に考える人を探すことになりました。今、隣にいる下道くんです。

下道基行（以下、下道）：と、いう事らしいです、はい。下道基行といいます。僕は写真を撮ったり、旅をしながら色々なものを探して作品をつくっています。例えば、2006年からはじめて2012年に完成した、日本の国境線の外側を旅しながら植民地時代の鳥居を探していく『torii』というシリーズがあります。その他に、僕の祖父が絵を描いて色々な人にあげて、その絵の飾られている風景と記憶を探しに行く『日曜画家』というシリーズなどがあります。

mamoruくんから相談を受けて、三人でミーティングをした際、森さんから「目と耳のエチュード」というお話が出てきて、「それはおもしろい!」と思いました。でも「エチュード」は、mamoruくんがアーティストとしてずっと追求してきたテーマなので「エチュードじゃないフレームってないかな?」と思いました。はじめは10人くらいの受講生と一緒に、体験して学んで、最後に何かをつくれたらと思いました。「目と耳のワークショップ」のような……色々な話はあったのですがまとまらず、結局、森さんから「お客さんと一緒に何かをつくるのではなくて、自分たちでリサーチする、そのフレームでだけでもいい。TARL（Tokyo Art Reserch Labの略）には講座だけじゃなくて、研究開発という枠もあるんだよ」と言われて。

mamoru：研究開発というフレームだと、開発したものを成果として見せないといけない。でも僕らはむしろ、自分たちの「インプット」の仕方をもっと考えてみたかった。「リサーチのためのリサーチ」という言葉を、はじめの頃は使っていたね。

下道：うん、つまり、リサーチをしている人たちがどういうことを考えて、実際にどういうリサーチをして、最後にどのような編集やアウトプットをしているのか、ということをテーマに、自分たちと違うフィールドで表現している人に会いに行ってみようと。

mamoru：色々な人にインタビューをするとして、それを最終的にどういうかたち（報告書）にするのか……それも重要。そんな漠然とした状態のまま、デザイナーの丸山くんに声をかけたんです。（笑）

丸山晶崇（以下、丸山）：デザイナーの丸山です。東京の外れのほうにある国立市の、さらに外れの谷保というところで、建築家たちと一緒に「やぼろじ」というコミュニティを立ち上げて、そこの運営をしながら、デザイン事務所をやっています。他にも個人でギャラリーと書店の運営をしています。もともとmamoruさんと下道さんとは府中市美術館で一緒にトークショーをさせて頂いたことがあり、今回それが縁で声をかけてもらいました。

mamoru：そのとき開催していた府中市美術館のグループ展のビジュアルを担当していて、すごく限られた予算でデザイナーとしての力を発揮していたんです。だから……。

下道：この混沌とした状況ごと、一緒に付き合って欲しいなぁ、と思いました。（笑）

丸山：なるべくデザイナーとして現場に立ち会って欲しいと言われたんですが、自分のお店の運営もあったので、全部は無理だなと。会いに行く人のリストを見ると東京以外に、関西や中国地方もあったりして。
　そのリストを見た時に、点と点ではなく、それらを線にして、「一つの旅にしちゃえばいいじゃん」って思ったんです。最終成果物をイメージしながら考えていたこともあって、全体のリサーチを一つの旅としてとらえると面白いんじゃないかと。

下道：僕らも、「それいいじゃん（笑）」って。

mamoru：それで、普段自分たちと関わらないような、アーティストとしてではなく何かを生み出している人たちとも話ができたらいいなと思っていたので、取材先のバラエティを出したいと思いました。そこで、一緒に旅するメンバーを増やして、その人たちの意見も取り入れようと思い、メンバー募集をかけたんです。

下道：はじめての面接官体験みたいな（笑）

mamoru：そんなことに興味を持っている人がいるってことを知るのも面白そうだし、とにかく募集してみようと。

下道：すると結構な人数の方々が来てくださったんです。

〈mamoru、下道、丸山が、舞台を降りて席に着く〉

（照明がスポットになり、急に面接シーンの再現になる）

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか?

mamoru：はい、どうぞ。

（ノックの音）

〈加藤、ドアを開けて隣室から入ってくる〉

加藤和也（以下、加藤）：どうもはじめまして。

一同：はじめまして。

〈加藤、照明を浴び、お客さんに向かって話し始める〉

加藤：どうも、加藤和也と申します。あだ名が「ノロ」なので、多分このあとの会話でも「ノロ」と呼ばれると思うので、よろしくお願いします。
　下道さんとは、もともと知り合いだったので、ちょっと「気まずいな」と思いながら面接を受けていました。
　僕は「FAIFAI」という演劇チームにいて、主に記録写真や映像、Web制作などを手掛けています。
　このプロジェクトに応募した動機は、「FAIFAI」で、舞台作品をつくっていると、その過程で残らないモノが多くて、ここ最近、その過程もちゃんと残しておきたいと考えていました。もともと舞台裏など、メイキング的な部分が好きだということもあって、今回のリサーチラボに参加して、リサーチの裏側を記録したりアーカイブについて考える機会を得たいと思い、参加しました。

〈加藤、着席する〉

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか?

mamoru：はい、どうぞ。

〈山崎、ドアを開けて入ってくる。同様に話し始める〉

山崎阿弥（以下、山崎）：はじめまして。山崎阿弥です。私は声のアーティストで、造形・映像作家でもあります。いま二つの作品づくりが進行しています。一つは「事実の羅列だけでその人を表現できないか」をテーマにある方の30年分の年譜を作成し作品化すること。もう一つはオノ・ヨーコの過去のパフォーマンス作品をモチーフにフィクションの映画をつくることです。どちらも過去に起こった“事実”から作品化する・フィクション化するという試みですが、最初の発想を作品に活かすのが難しくて……。そのタイミングで旅ラボのことを知りました。旅という言葉自体にもひかれましたが、場所が変わればインプットも変わるし、インプットが変わればアウトプットも変わるだろうな、と思ったんです。
　また、新聞記者をやったり、シンクタンクで調査やインタビューの仕事をしてきた経験もあったので、もしチームに入れなくても何かお手伝いできることがあるかなと思いました。特技は知らない人から物をもらうことです。米一俵とか、ねぎ十本とか。お金を払わないと入れないようなところで、誰かが払ってくれたりとか。

〈山崎、着席する〉

スタッフ：次の方、お呼びしても良いですか?

mamoru：はい、どうぞ。

〈ジョイス、同様に入り話し始める〉

Joyce Lam（以下、ジョイス）：ジョイス・ラムと申します。出身は香港ですけれど、今は日本の大学院でアートプロジェクトについて研究しています。アーティストが地域に入って、その土地のことを調べ、作品をつくって、それがどのように人が移動するきっかけになっているのかというテーマに取り組んでいます。所属している研究室で学術以外にも、さまざまな人がどのようなリサーチをしているのか、もっと知りたいのと、旅という言葉にもひかれて応募しました。

〈ジョイス、着席する〉

（フラットな照明に戻る）

下道：……とまぁ、こんな感じで、予想以上にたくさんの方が来られて、しかも色々な特技のある方、魅力的な方がいらっしゃいました。はじめ、実は四人乗りの車を僕と丸ちゃんが持っていたので、あと一人だけ募集するつもりだったんです。それで「記録」は今回とても重要な要素だと思っていたので、そこに強い思い入れがある人という事でノロが採用となったのですが……

mamoru：そうなると、まあ見てくださいよ。一、二、三、四人……と男ばっかり。

下道：二人の女性に対してそういう意味で選んだのではないのですが、男が四人で色々な人に話を聞きに行くっていうのも、はっきり言って来られる側もむさ苦しいだろうと思いました。

mamoru：色々なところに取材に行った経験からも、女性がいるのと、いないのとでは、話を聞き出すタイミングやアポをとる早さが変わってくるんですよ。そこで何とか人を増やせないのかな、というのがありました。

下道：そしたら「レンタカーで六人乗れる車にしたらいいじゃないか」というアイデアが天から降ってきた（笑）、そして彼女たちを選びました。

mamoru：予算の組み替えもやりました。具体的には宿の予算を削ったりして、工夫すればなんとかなるだろう、と。

下道：面接が終わり、メンバーが決まりました。ここから旅がはじまります。

〈下道、地図が映し出された舞台上スクリーンに歩み寄る〉

下道：まず、面接の翌日から、僕はまず一人で沖縄に滞在制作をしに行くことになっていて、小説家の原田マハさん（裏面①参照）にインタビューを行ないました。最近、彼女は戦後すぐの沖縄を舞台にした小説を書かれていて、史実のリサーチからフィクションをつくるお話を聞きたいと思いました。

〈mamoru、地図が映し出された舞台上スクリーンに歩み寄る〉

mamoru：僕は面接の翌日から自分の作品のリサーチのために北海道へ向かいました。北海道開拓やアイヌの文化にまつわる研究者の方達に会う機会が多かったので彼らのリサーチ手法なども聞いたりしていたのですが、「北方資料ならここ」と薦められて「サッポロ堂書店」という古書店を訪ねました。店主の石原誠さんから得意分野が一目でわかる目録の世界、年3、4タイトルを新刊で出版してきたお話しなどを伺いました。

下道：僕らが東京に戻って来て6人揃って、まず東京を中心に会いに行ける方に会いに行ってみようということで、6月28日に高橋裕臣さん（裏面②参照）にお会いしました。この方はテレビ番組の制作に携わるリサーチ会社「オフィスHIT」の社長さんです。ここでいうリサーチ会社というのは、番組制作に必要な情報収集をするリサーチのプロです。

mamoru：その次の日。PortBという演劇ユニットの演出家の高山明さん（裏面③参照）にお会いしました。ちょうどいま、横浜トリエンナーレで新作も発表されていますが、様々な土地で歴史的な部分にも触れながらリサーチベースで作品を大規模に展開されている作家さんです。
　次に大大大先輩のフィールドワーカーとして民族音楽学者の小泉文夫さん（裏面④参照）の、東京藝術大学の中にある資料室を訪れて、彼がどういうふうにフィールドワークしていたのかということを聞いてきました。

下道：もう一人の大大大先輩という事で、民俗学者の宮本常一さん（裏面⑤参照）に関わる資料や実際に収集された民具を見学に武蔵野美術大学民俗資料室を訪れ、後日同じ場所で竹民具研究の工藤員功さん（裏面⑥参照）からお話を伺いました。

mamoru：そしていよいよ7月24日。「山口でこの宿とったから現地集合」という感じで、9日間メンバー全員での旅がはじまりました。

下道：翌日25日に車を借り、古書店であり小規模出版をやられているマツノ書店二代目の松村久さん（裏面⑦参照）という方に会いに行きました。この方は明治維新関連の絶版出版物の復刻出版を小規模ながら地方発信で行なっていることに興味を持ちました。
　それから、その日の午後に周防大島に渡りました。そこは宮本常一さんの出身地ですので、周防大島文化交流センターと久賀歴史民俗資料館というところで、宮本常一さんと一緒に民具を集めたり、調査をされていた方に会いました。

mamoru：その日は、民俗学の大家の足跡を辿るような充実した日でしたね。次に広島に向かい、広島市現代美術館のチーフキュレーターをされている神谷幸江さん（裏面⑧参照）に会いに行きました。キュレーターとしてのリサーチ、そしてリサーチベースで制作しているアーティストとかなり深くお仕事をされていると聞いていたので、お話を伺って来ました。

下道：その後、“食”のフィールドワークから何か表現をしている方を全員で探し、声を掛けていたのですが、スケジュールがあわなかったので、調整しながらの移動と

なりました。“食”で探していた理由としては、以前旅行中に麺類を食べ歩いて最終的に日本でラーメン屋か何かを始めたいという旅人と出会ったことがあったからです。そういうのもフィールドワークと表現ではないか、と。

mamoru：京都でそういう方がいて会えそうだけど、連絡がなかなか繋がらなかったのですが、思い切って京都まで行ってしまおうと、6時間かけて行きました。あとあと考えると雑談も含めて、この長い車での移動の時間が編集会議となり、ここで何かが生まれていくというのが、面白かったです。最初は宿でミーティングをするのかなと思っていたし、そういうふうに設定もしていたんですが、実は車の中が一番密度が高いということがわかってきた6時間でした。
　京都では残念なことにその方に会えなかったので、兵庫県淡路島に移動しました。そこで、無人野菜直売箱を探して地図をつくっているグループに出会いました。

山崎：その後、京都で会えなかった方と連絡がとれまして、淡路島からもう1回京都に戻ったんです。郷土菓子研究家の林周作さん（裏面⑨参照）です。この方は1988年生まれで、ご自身でお菓子をつくったりもできるんですけれど、ユーラシア大陸に自転車で移動して32カ国200種類のお菓子を食べてこられたんです。
　その後、大阪で国立民族学博物館の助教で映像人類学者の川瀬慈さん（裏面⑩参照）にお話を伺いました。

mamoru：川瀬さんは、エチオピアで研究、映像制作をされているんですが、民博でお話を聞かせて頂いた後、川瀬さんもお連れして、「あいのり」みたいに「誰が降りるんだ」なんて冗談を言いながら大阪府堺市の宿に移りました。そして宿の数軒隣りにあるカレー屋「ヌンクイ」に行き、美味しいカレーを頂き、カレーのレシピ習得を目的にこれまでインドやタンザニアに旅をしたという店主の町野珠美さんにお話を伺いました。

山崎：本当は大阪でレンタカーを乗り捨てようということになっていたんですが、車で移動中に話をすると、色々な発見があるということに気がついて、このまま長野まで行ってしまおうとなって。

ジョイス：長野に移動して、雑誌『Spectator』の編集長、青野利光さん（裏面⑪参照）に取材させて頂きました。『Spectator』は、三人という少人数で編集され、毎回特集を企画し取材を重ね、1年に3号ずつ、現在までで30号出版されている雑誌です。

mamoru：最後に、長野県に本店を構える、丸山珈琲というスペシャルティコーヒーで有名なお店がありまして、世界中を飛び回ってコーヒー豆を買い付けておられるという社長さんに取材できないかなと思ってだいぶ粘ってコンタクトをとっていたんですが、残念ながらお忙しいとの事で、お会いできませんでした。「でも、旅の最後をおいしいコーヒーでしめるのは悪くないな」なんて言いながら帰ることになりました。
　そして、車をここで乗り捨てようということになってましたが、ここまで来たら車で帰ろうということで新宿まで帰ってきました。その時点で走行距離が1856km。

下道：車中でよく話しましたよね、色々なことを。で、帰ってみると……。

山崎：取材ができなかった丸山珈琲の広報の方から「取材OKです」という電話が入り、トークの2日前、8月8日に西麻布店で丸山健太郎さん（裏面⑫参照）にたっぷり2時間お話を聞くことができました。

mamoru：その頃……。

下道：はい、下道は展示の搬入があってまたまた山口に帰っており、山口まで行けるならぜひ会いたい方がいて。それが初代漂着物学会の会長の石井忠さん（裏面⑬参照）。日本で一番漂着物に詳しい方です。ボトルレターも何本も拾っているすごい人で、ぜひお会いして話しを聞きたいと思って福岡まで行きました。石井さんのご自宅は漂着物の博物館のような驚きの場所でした。

mamoru：まだ終わったという感じもしないのですが、僕らの2ヶ月はそういう旅でした。

下道：お一人ずつをきちんと紹介して、その感動を伝えたいくらい面白い方たちだったのですが、10人以上の方々となると限られた時間内ではそれだけでパンクしてしまうので、ざっと経緯をご紹介しようというのがこの前半なんです。
　はじめは「インタビュー本をつくろう」というアイデアもあったんですが、「フィールドワークと表現」というタイトルをつけると、「なぜこのタイトルでこの人選なのだ!?」と批判もあるだろうと想像できましたし、どっちにしろインタビュー本としては網羅なんてできないのでは?という不安もあり……そんなとき、車の中での会話がヒントになりました。「そう言えばさっきインタビューした方のこういう話が面白かった」「だったらあの人のあの話と近いね」「それだったら……」と、内容が連鎖していく感じが面白いなぁと思い、一回インタビューした事をそれぞれで反芻して、並べてみて、分解し、新しくカテゴリーをつくり、並び替えてみようと。それが今から行なう後半のトークです。

mamoru：一回ここで休憩しますが、会場の後ろに旅で会った方々の著作もありますので、良かったら手に取ってみて下さい。その他に手書きのノート（蛇腹の冊子として発行）があります。僕らはそれをB面と呼んでいるんですが、宿でミーティングをした時などに今日何があったかということを時系列にした行動記録と、雑談やその日の出来事から考えたことなどが書き込まれています。ご興味あればそちらもあわせて読んでみて下さい。

---------- 5分休憩 ----------

（照明がスポットに。スクリーンにタイトルが出る）

《リサーチと収集法》

mamoru：まず、旅のプロセス自体が僕らにとって、非常に意味のあるものでした。今回はそのプロセスで見えてきたトピックとして、「リサーチと収集法」「お礼と作法」「アウトプットと表現」ということについて話してみようと思います。今から話す内容は、「すでに編集されたもの」として受け止めて頂けたらと思います。

一般的にフィールドワークは「現地調査」という意味で捉えられます。研究対象となる社会や地域に赴き、その土地に暮らす人々にインタビュー調査し、自分自身も同じ経験をすることを通じて生活や社会の仕組み、その土地ならではの考え方の枠組みを理解しようとする社会調査の手法です。こうした調査方法は 20 世紀初頭に文化人類学の方法として誕生して、その後社会学、民族学／民俗学、地理学など幅広い分野で用いられるようになったと言われています。

フィールドワークの結果、書かれたものを「民族誌」（エスノグラフィー）と呼びますが、『フィールドワークの技法』（新曜社 2002）の中で佐藤郁哉氏が「民族誌というのは、ほんらい旅行記、ルポルタージュ、学術文献、小説などさまざまなジャンルの文章の特徴をあわせもつ混成ジャンルの文章であり、文学と科学という二つの領域にまたがる性格をもっているのです」と書いている通り、もともとジャンルをまたがる性格を持つフィールドワーク的な手法は、今では学術的な枠も超えてアートやその他の現場でも使われていて、僕達もその一端だと思うし、他にもそういう人達はいるだろう、と。

下道：以前は現代アートの作家はアトリエなどで制作する事が一般的なイメージだった。ただ、日本では特に2000年以降、地方での芸術祭や滞在制作が増え、フィールドワークという言葉を急に目にするようになってきた気がします。

今回は、僕らなりに接触する他のジャンルから学びながら、さらに“研究者”や“現代美術作家”でもない職業の人々のフィールドワークと表現を探ろうと考えたのです。けれど少し大きく掲げ過ぎましたかね（笑）。とにかく色々な方から調査や編集の極意を学ぼうと。

山崎：さて、東京にお二人が戻って来て最初に会った方からいきましょうか。テレビ番組のリサーチをされている「オフィスHIT」の社長、高橋裕臣さん、ですよね。テレビ番組制作の背景で、色々なリサーチをされているというお話からはじまったかと思います。高橋さんは、表現者ではなく根っからのリサーチャーですね。

〈ノロ、スクリーンに取材時の写真を写す〉

下道：高橋さんは大学生の頃に瞽女（ゴゼ／日本各地にかつて存在した盲目の女性芸能者）に興味を持ち調査を行なっていたそうで、元々民俗学的関心の強い方という印象を受けました。普段電車に乗っている時に、吊り広告などを眺めるのもリサーチの一環だと仰っていました。若者やお年寄りなどの間で流行っているものを観察したりすることも必要で、街を歩いていても何かとチェックしているそうです。それって、ちょっと考現学的かもしれないけど、ただその目線が違う。テレビ番組になるかどうか、が判断の基準だから。

山崎：日常で目に入るものすべてがリサーチ対象といった感じですね。

下道：高橋さんのフィールドであるテレビ番組制作のリサーチでの「収集法」の話をすると、日本中の面白いネタをたくさん集めてきて、「うちの町にはこんなのがある!」みたいな発表をする番組があり、小学生から大人まで幅広い視聴者から情報が寄せられるのですが、同時に何社かリサーチ会社が日本中の情報を探して番組制作を支えていたようです。具体的なリサーチの方法としては、日本中の新聞、雑誌、テレビ番組を、分担して「できるかぎりすべてを見る」と話されていたのが印象的でした。そこからネタになりそうなものを探して、あれば会議にあげて、そこから番組をつくっていく。それは個人ではなくテレビ番組だからこそできたことかもしれませんが。

―――――― できる限りすべて集めてみること

mamoru：そういえば、宮本常一さん関連の資料館を訪ねた時にも、「全部集めなさい」という言葉が何度も出てましたよね?

下道：そうそう。たとえば民具だったら、「同じ形でも少しでも違う部分があれば、全部集める」という具合に。やはりそれは収集の基本かも。でも難しいですよね。

宮本さんが武蔵野美術大学で教鞭を取られていたとき、生活文化研究会というのを学生さんたちとやっていて、その時から民具の収集を一緒に行なっていた工藤さんは、ある地域に民俗資料館をつくった時「2万点くらいは集めなさい」と宮本さんから言われたそうです。そのくらい集めると体系づけられるというのが宮本さんの中にあったのでしょうかね。これは経験からくるアウトプットへの編集感覚かもしれません。

あと、漂着物の研究家の石井さん。この方は『新編漂着物事典』（海鳥社 1999）という本で知ったのですが、これがすばらしいんです。色々な漂着物が収集され辞典になっている。さらに、石井さんご本人がものすごくポエティックにそれらの漂着物についての説明を書かれていて、これがまた面白い。石井さんの家は浜辺からすぐの所にあって、浜辺の約50kmを15kmか20kmで区切って2、3ヶ月歩き通す、これをひたすら繰り返していたらしいんです。本が出たときすでに「三十年の集大成」と書かれていたので……、相当長くやっておられるんです。

mamoru：高橋さんの話でもう一つ印象的だったのは、「クイズ番組の“正解”は実は難しい」ということ。テレビなので色々な視聴者が見ていて、正解が間違っていたり曖昧だと、クレームが出ることもあるそうです。そのために3ソースくらい裏をとるという話が、僕は印象に残っています。

例えばかつて「猫の定義は耳が立っているかどうかで判断する」という話があって、でも耳がしゅんと垂れている種類の猫が登場して、「それは違うんじゃないか」というクレームがあった、と。

そういう「正解」の裏の取り方としては、“その道の権威に意見を聞く”そうです。権威とは、研究者やそのトピックに関して本を出している人や、その分野でできるだけ一番詳しい人、かつ権威のある人のことです。

―――――― できる限り一番詳しい人の言葉を得る

mamoru：他にも、サッポロ堂書店とマツノ書店さんにお話を聞いたときに面白かったのは、「この本の量見てよ、こんなの全部を読めるわけないですよ」と言われて「そりゃそうだよな」と思いつつ、「あ、読んでないんだ」と結構ショックだったんです（笑）。じゃあ「どうやって本の価値を判断し、どの本を復刻していくのか」と聞いたら「よく知っている人に聞けばわかるから」とあっさり言われたんです。もちろん長年の経験からも判断されているのですが、これは真実で、何かを調べるとき、やっぱり詳しい人に話を聞きにいくのが一番なんだな、と印象に残りました。

下道：「すべて集める」とか「一番詳しい人に聞く」とか、当たり前の事だけど、重要なリサーチの基礎なのかも。

山崎：収集する前提として、どこに収集に行くのかという話もあって。『Spectator』という雑誌の青野さんは取材先の選定についても話を聞かせてくれました。最新号で30号まで出版しています。編集長の他にも編集者が二人いて、みんなが共通して考えていることがあったり、それぞれが収集してくることもあるそうです。三人集まって「最近どう?」という話の中でタイトルや特集が決まっていったり、「最近小さな商いをしている人が多いよね」という話になって、「小商い」の特集になったり。何人かで情報を持ち寄りながら拾い上げていく感じ。

mamoru：自分たちでリストアップして、ネタは収集されてるんだけど、会話の中や投稿されてきた別の要素も重ねていって、収集段階から編集が始まっていることが興味深かったですね。

山崎：ジョイちゃんは編集の仕事をしているんだよね?

ジョイス：はい、そうです。あと青野さんは取材でアメリカに行ったときに、次の号のテーマを見つけたりするんですよね。

山崎：雑誌をつくりながら、次のリサーチになっていると。

mamoru：移動しているときに、常に情報収集にオープンになっているところはみなさん共通してるんじゃないかなと思います。

下道：雑誌『Spectator』では、まずテーマが決まった後に、相当資料を読み込むそうで、1号1号、編集者自身もテーマを深く掘り下げていく。その「知っていく過程」感がいいなと思いました。

山崎：ちなみに次の号は「禅」だそうです。禅についても徹底的に調べるんですよね。禅寺にも行っているそうです。

下道：リサーチが体験としてインプットされていく感じ。

mamoru：次は映像人類学者の川瀬さん。ずばり、川瀬さん自身の収集法について聞いてみました。するとちょっと間があって、「(対象は) 向こうからやって来るんだよね」と。その感覚って、調べたり、何かつくっていたらわかる方もいらっしゃると思うんですが、僕もすごくその言葉が腑に落ちました。

山崎：川瀬さんは実を言うと最初は、インドの研究を志したものの、結局は、アフリカの研究の方へ進むことになったそうです。そして「エチオピアの鍛冶屋について調べて来い」と先生に言われたけれど「鍛冶屋より、音楽だなあ」と思ってアコースティックギターを一本持って、エチオピアに行かれました。そこで現地の音楽・芸能、憑依儀礼や吟遊詩人を調べて来る。現地ではストリートでの様々な発見や、人と人のつながりのなかに生成するいろんな出来事に対して、オープンな姿勢でリサーチを続けたそうです。

下道：例えば、『Room 11, Ethiopia Hotel』(2006年) という映画は、川瀬さんの泊まっている部屋の中だけでカメラを回しています。自分の宿の窓からストリートチルドレンが見えて、彼らが色んな商いをしていた。そういう子たちが、部屋にだんだん入ってきて、会話をし、関係が出来上がっていく。川瀬さんが自分自身の扉を開けているからというのもあるし、子供が入ってきやすい間合いを掴むコツもあるなぁと感じました。

山崎：フレームの余白や舞台裏とかが、何かを呼び込むんだろうね。

——————— 呼び込む“余白”部分の大切さ

下道：余白という話でいくと、小説家の原田マハさんに、「物語とはどうやって出会うんですか?」と質問したら「作品によって違うけど、ネタの方からやってくる感じです。こっちから予想して頑張って見つけたことはほとんどないな」と言っておられました。やはり“余白”の話になりました。『太陽の棘』(2014年／文藝春秋) という、戦後まもない沖縄の進駐軍と画家の小説は、史実をもとにしています。その史実をどうやって見つけたのか聞いてみたら「2009年に日曜美術館を見ていたら、そういう展示があると知り、『これはちょっとドラマの匂いがするな』と考え、次の日には沖縄に行って、実際に絵の前に立って、その時から物語はスタートしました」と。

山崎：すごい行動力ですね。mamoruさんも下道さんも一人でリサーチするんですか?

mamoru：プロジェクトによって違うんですが、僕はグループでやることに興味があって、例えばベトナムのハノイというところで音のフィールドワークをしたときは、映画の学生に手伝ってもらいました。10分間聴こえてきた音をメモするだけなのですが、あとでお互い交換して、別の人の聞いた世界を、メモを読むことで追体験すると、だんだん耳が鍛えられていく。次にみんなに好きな場所でやってきて貰うのですが、ある意味で僕自身の耳が偏在している様な感覚になる。実際に自分の耳で聴いていない音だったとしても、チームの誰かの耳を通して聴こえてきて、取り込む範囲が広がるんです。

下道：僕の場合は、気の合う仲間と一緒のときもありますし、プロジェクトの場合は地元の方で元気な女性と動く事が多いですね。『torii』というシリーズでも、一番はじめの旅は、「南の島に行こうよ」と彼女を連れて一緒に行ってます。そういう旅をしながら自分なりに風景や人と出会い、自分に合うなにかとグッと出会ったらそこから何かがはじまる。知らない町や海外の取材では通訳さんと二人で旅をして、通訳さんが何かを見つけてくることがありますね。

山崎：二人はそれぞれ人と協力する場合もあるということですが、インタビューさせてもらった人の中でも、誰かに調査や収集に行ってもらうという人もいました。

——————— 調査収集を人に任せる手法

mamoru：そうですね。PortBの高山明さんはご自身もリサーチされるけど、今はリサーチャーをチームの中に組み込んで、そういう人にやってもらうほうがいいと仰ってましたね。さっきの専門家の話につながりますが、専門でやってる人にお願いしたほうがいい場合もあるし、あくまでも自分で調べ続けてる人もいた。

下道：僕は逆に写真だから現場に立たないとできないことが多い。たとえ自分で撮影を行なわないにしても、調査収集を人に丸投げするのは考えにくいかも。

mamoru：そうですね。高山さんは演劇だし、メディアの特性もあるよね。

下道：宮本常一さんの話で興味深かったのは、60歳ごろから武蔵野美術大学で先生をなさっていて、「生活文化研究会」をつくって学生と一緒にフィールドワークをされています。他にも近畿日本ツーリストの出資で「日本観光文化研究所」というのもやっておられて、そちらも若い人たちと一緒に民具などを探しています。その収集方法もとても面白くて、学生さんに「君は日本中の焼き物について調べてきなさい」みたいに、どんと課題を渡す。僕が会いに行ったのは竹民具研究者の工藤員功さんという方なんですが、この方は「君は竹の民具を探しなさい」と言われて、竹のことを全く知らないのに竹について調べ探しはじめたそうです。結局、工藤さんは今では竹民具研究者になられています。ご本人が仰っていたのは「何も知らなかったから、一つずつ、探しながら発見する。もしかすると、中途半端に知らなかったのは逆に良かったのかもしれません」と話されていました。

mamoru：このお話を聞いた時に、宮本さんなりに学生さんの特性とかキャラクターを知った上で課題を託していたのかな、と思いました。さっきも紹介した通り、僕はグループワークを積極的に取り入れてますが、必ずしもいつも同じメンバーがいるわけじゃなくて、行った先で協力してくれる人の興味や特性を活かしてプロジェクトチームをつくります。メンバーの特性を見抜いて、プロジェクトの推進力に転換するというのがやはり必要で、これもある種の技術だと思います。マニラではアマチュア登山家がメンバーにいたので、リサーチ場所を絞り込む際に、一つの山をいれたんですね。「じゃあこの山のほるから、全部アレンジしてね」と言うと、目の色変えてやってくれる。

山崎：そういう時ってコミュニケーション力というか、言語能力が問われますよね。頼み方の技術というか。民族音楽学者の小泉さんはご自分で世界中をまわられていましたが、いろんな国の言葉を使いこなしておられて、その場所その場所で何か収集しようとするときに、笑顔と言語能力でどんどんコミュニティの中に入っていかれたそうです。しかも、この方は末っ子で、みんなに受け入れられやすかったのでは、というお話も印象的でした。国内のフィールドワークに関しては、藝大のゼミ生をフル活用しておられた点は宮本さんとも共通していますよね。

《お礼と作法》

下道：次のテーマ「お礼と作法」です。インタビューは、その人から何かを譲ってもらったり、“搾取”したり、借りたりという性格があるので、マナーやお礼もセットで考えたい。

mamoru：小泉さんは、研究室で国内のわらべ歌研究のため、取材先にゼミ生を送り込む際に、現地での録音や採譜にあたっての注意点を整理した取材メモを配布されていました。そこには技術的な事だけではなく礼儀作法に関しても書かれていました。今回、特別に許可を頂いたので一部分ですが紹介させて頂きます。

「沖縄音楽採集の手引き」

’74.12.18

東京芸術大学民俗音楽ゼミナール

I 採集にのぞむ態度
音楽のみならず、あらゆる分野でfolkloreの研究が盛んな今日、特にその対象として選ばれる土地の人々は非常な調査疲れをしている。そのため我々の調査隊が土地の人々に迷惑をかけないよう心がけねばならない。
又、「民族音楽学」の対象とされるものは、単に未開の、或いは未発達の段階にある音楽という誤解を受けやすい。それ故、我々は「調査」とか「民族音楽学」という言葉をなるべく避け“学びにきたのであり、当地のすばらしい音楽を研究し、記録に残すためにやってきた”というべきであろう。

Field Work、Field Tripが完全に終るまで―つまり東京を出て、目的地へ行き、仕事を終え、東京に帰るまで―各自の身体には気をつけ（自分にあった医薬品を持って行くこと）責任が果たせるように努めよう。採集後の研究にまで参加すること。

私たちが当地に滞在すると、たとえ2、3日間のことであっても、また調査中でなくとも、どんな人たちにも決して悪い印象を与えないように注意したいものである。
また、我々の立場や身分や目的を故意に隠して、informantの立場やプライバシーを犯すようなことにならないように努めたい。つまり、無理をして、だまし採ってくるような結果にならないように努めよう。

　また、取材先の数が膨大で毎回手土産を持っていくと大変ということで、そういうときに「小泉研究室」という文字の入った手ぬぐいをつくって渡していた、と伺いました。

下道：それを聞き、僕らもこのメンバーで「手ぬぐいをつくろう!」となり……すぐにデザイナーの丸ちゃんに伝えました。

mamoru：だいたい1週間～ 2週間くらいでデザインして、発注して、早速旅の時にお世話になった方々に配りました。すぐに吸収して、すぐにアウトプットするのが今回の僕らのスタイル（笑）

山崎：「お礼」の話に戻りますが、周防大島に行った時、宮本常一さんの民具の収集を手伝ったという人達が、お礼としてもらったものが出てきたんです。金本豊さんという方で、見せたくてしかたない、という具合に大事そうに抱えておられた。手書きの短歌の色紙です。

『田も畑も　みかんを植えて　あますなく　ふるさとの島　青きひといろ　宮本常一』

下道：それにしても「宝物」という感じで抱えてらっしゃいましたねぇ。

ジョイス：他に手伝った人もいらしたのですが、一句一句、違う歌を書かれていたそうです。

山崎：色紙も“もの”として残るものですが、『Spectator』という雑誌も紙媒体で残るものですよね。編集長の青野さんのお話では、ライターに報酬は払うものの、取材先には雑誌『Spectator』が送られる。手紙を添えて。青野さんって笑顔が素敵な方で、自分が知りたいと思って、リスペクトの心を持って会いに行かれるので、青

野さん自体がお礼の一種のようにも感じました。その人となりも相手に対するプレゼントだなと思いました。

mamoru：そんなのあたりまえでしょう、と言わんばかりに目をきらっとして「いや、俺最高にリスペクトで行ってるから」と（笑）。みんなメモりましたね。

下道：小説家の原田マハさんは、実際物語のモデルになった人々がいるわけで、画家の方や、戦後すぐに沖縄に駐屯していたアメリカ人の方にも会いに行っているんです。原田さんの場合「あなたをモデルにこういう小説を書きたいです」とお願いはするらしいのですが、小説なのでフィクションだから「モデルの方であっても内容には触れさせない」と話されていました。ただ「そのモデルになる人たちを“おとしめない”といつも決めています」とも話されてました。そしてお礼としては、最終的に「こういう新しい世界があなたの協力で生まれました」と本の形で返す。

インタビューの時も沖縄を舞台にした小説が完成し、トークイベントのために沖縄にいらしていて「今は本ができあがったばかりで、話を聞いた人に渡しに行ってる最中。それもまた旅の途中なんです」と言っていました。

山崎：小説の完成が旅の終わりではないということ……?

下道：そう、本をちゃんと返すところまでが重要な旅だということでした。

山崎：次に郷土菓子研究家の林さんですが、彼は各地のお菓子を調べながら旅していて、自転車の脇にお団子をつくるための材料と道具をいれて、お世話になった人にお団子をつくってふるまっていたらしいんですね。すると、その材料がどんどんなくなり、現地調達ができるもので何がつくれるかと考えたとき、団子からどらやきに変化していった。

mamoru：粉もだいたいあるし、豆や砂糖もある。そしたらあんこはつくれるし、皮の部分もつくれるだろう、と。

下道：林さんは旅をしながら『THE PASTRY TIMES』というフリーペーパーを発行しているんですが、アウトプットとして面白い。これにはレシピが一つだけ載っていて、そのレシピを完成させる練習で作られたものが、旅先ですぐにお礼にもなっていたそうです。

山崎：林さんは、旅の予算を日数で割って、1日だいたい$5（3ユーロ）でやりくりしていたそうなのですが、途中で泊めてもらった家族にPCなど全部盗まれたりして、旅のお金がつきちゃったことがあったそうです。そこで旅をしながらフリーペーパーを発行して、日本に送って、一口2000円で寄付をもらって、40万くらい集めて旅の資金にしていたそうです。

下道：「お礼」というと、当たり前に聞こえますが「お金」で返すという方もいらっしゃいましたね。たとえば、高山明さんは、関わってくれた方のお礼は「まずお金かな」と答えられました。「ある意味では、素人の方から“搾取”して、編集して作品にしているので、労働として取り組んでもらうつもりでやっています。お金で時間や空間という枠組みを買って、終わったらぱっと終わり!というイメージです。やっぱりごまかしながらやってもらうのは悪いので、お金を払うんです」という話を聞きました。

mamoru：これはお礼であると同時に一種の演出とも考えられるのではないかと思いました。と言うのも、お金が払われることによって相手は強制的にプロ化される。高山さんの作品ではいわゆる役者ではない人達が多く起用されています。最初にリサーチベースでつくられた『Zero Hour』という作品でも、高島平に住んでいるお年寄りの方々に舞台に上がってもらって「このタイミングで呼びこむので、年表を読んで下さい」とお願いしたそうです。そういう場合でも、お金を支払うことによって、フレームをつくることができる。つまり彼らはベイされるという意識があるので、演じはじめるんではないか、と思いました。そこを含めて演出してらっしゃるんではないかな、と思ったんです。

下道：逆に「お金を払わないほうがいいんじゃないか」という意見もありましたね。

山崎：関係性によると思うんですが、川瀬さんは、アシスタントやインフォーマント（情報提供者）にお金を払いすぎるとぎくしゃくする、とおっしゃっていました。エチオピアで映像の被写体となった人とは、お金のやりとりを超えた、一種の共犯関係を築いているともおっしゃいました。川瀬さんが映像に収めているラリベロッチやアズマリとよばれる音楽集団は、芸ごとをする、一種の被差別民なんですね。今でもエチオピア北部の地域社会では差別を受けていて、エチオピアの文化省の役人なんかは、当集団を“恥ずべき存在”として隠しておきたいそうです。でも当集団は川瀬さんを使って自分たちをエチオピアの外へアピールし、表現するというメリットがある。

mamoru：色々だなと思いますね。問われるのは、相手に対する誠意だと思うんです。丸山珈琲の丸山さんは、ビジネスなので表現と呼んでいいかわからないですが、ビジネスである限りは、当然お金を支払わなきゃいけない。でもそれ以上のことをされていると思った。生産地に実際に行くということもふくめて、生産者の生活を実際に見ているので、一番大事なのは毎年買い続けるということだと。そして少しでも買う量を増やしていくということ。それが一番の「お礼」の意志表示だと仰ったんですね。農作物なので、良い時もあれば悪いときもある。実際には去年より味が落ちているかもしれない。でも買い続ける、買い足す、買い増やすと仰ってましたね。

山崎：あと、人間の悩みなんてどこにいっても一緒だと仰っていました。家族のことや、お金のこと。いまmamoruさんが言った「ちゃんと買う」ということに加えて、生産者が生活をするために、現地で奨学金の制度や託児所をつくったりもされています。豆の摘み取りの作業の際におんぶしている赤ちゃんの顔に枝があたってしまうことがあるそうで、それを防ぐために赤ちゃんを預けて農作業できるようにしたり。

それから、丸山さんは、コーヒーを飲んだだけでその可能性の有無がわかるそうなんです。その豆を生産者と一緒に育てていくということもお礼の一つと仰っていました。いろんなお礼のかたちがありますね。

mamoru：僕は取材対象の方に対しては、自己紹介を兼ねて自分のカタログを持って行ったり、作品づくりに関わってくれた人にはできる限り、参加証明書を発行するようにしています。映画のエンドロールみたいな気分で。作品の種類によってはそれを差し上げる場合もあります。それはお礼の気持ちもありますが、作品をつくる側になったんだと思ってもらいたいんです。そして、その事を誇りに思ってもらえたら一番のお礼になるんじゃないかなという気持ちがあります。

《アウトプットと表現》

mamoru：さて、「リサーチと収集」「お礼と作法」ときて、最後は「アウトプットと表現」についてお話したいと思います。
　まず高橋さん、「私の場合はリサーチ自体が目的です。表現ではないです」と仰っていました。確かに、何が“表現”と呼べるのかという問題はありますが、リサーチし、収集された物たちは、それぞれの感覚で編集されて、人の目に触れていると思うんです。だからここでは、アウトプットするための編集の意識を中心に考えたいと思います。

山崎：そういえば、下道さんが写真を発表するひとつのきっかけが、雑誌『Spectator』の「WANTED ／君の記事を求む!」というページで読者から記事を募集していて、そこに持ち込んだことだったとか。

下道：そう、雑誌に記事を載せて沢山の人に見て欲しいなぁと思っていたので。2003年にその記事を発見して、直接電話して、編集長の青野さんに会いに行ったんですね。「こういうのを最近見つけたんで、面白いから記事にしたい」と。すると「うん。連載にしてみよう」と。この雑誌は、自分の手で新しい世界を見つけてきて人に表現させる、ページというか余白を持っている。2年間で4回だけでしたが、初めて記事を書いてお金をもらいました。すごくうれしかったですね。
　僕はここで学校とは違う多くの事を学ばせてもらいました。少し違うかもしれませんが、若い作家の学ぶ場所として、宮本さんが作られた旅の月刊誌『あるくみるきく』（日本観光文化研究所、1967-88）は、記事もプロのライターさんに依頼するのではなく、若い研究者や学生が旅の成果を発表できる場所だった。記事を書くとギャラもあったそうです。インプットとアウトプットのプラットホームとしての雑誌っていいよね。

記録と表現

山崎：表現というと、川瀬さんから出た、非常に印象的な言葉があった。それが「記録と表現の動的均衡」。

下道：簡単に言うと「記録と表現とのバランス」かな。川瀬さんは映像人類学者なので、文化を記録することは最も重要な仕事だと思います。例えば、ある集落で人々が歌っているとき、その歌は消えていくから、記録しておく。これは映像人類学というフィールドの大前提。ただ、当分野での従来の記録方法は、まず三脚を立ててカメラが動かないよう固定する。そして、撮影者／調査者の存在を消去して、対象を淡々と観察し、記録するというスタイルでした。それによってフラットで、「客観的な」記録が可能になると、信じられていたんです。でもやっぱり、そこにカメラがあるし、自分は対象の社会に介入してる。川瀬さんは、映像から消し去ることができない己の存在を逆手にとって、対象の世界に自らがぐっと入り込んだ文化の表象方法を探求してきたと仰っていましたね。

mamoru：民族学の前世代の人たちは「透明人間」という言葉を信じていたと。でもそんなわけはなくて、そこにあなたはいる……。

下道：「記録と表現の動的均衡」ってやっぱり面白い言葉だなぁ。カメラや文字や記録媒体を持つ作家は、いつもぶつかる壁かもしれない。青野さんが『Spectator』で実践しているニュージャーナリズムというのがあって、1960年代にアメリカで始まった新しいジャーナリズムのスタイルなのですが、これはベトナム戦争の時、ジャーナリズムの客観的な手法に行き詰まりを感じた人たちが、客観性を捨て主体的に書き始めたスタイルなんです。
　そういえば、宮本常一さんの『忘れられた日本人』（未來社、1960 ／岩波文庫、1984）という素晴らしい本も1960年発行です。宮本さんは民俗学者なので、高度経済成長期にどんどん捨てられていく「過去から繋がる人々の生活」を目の前にして、残さなきゃという気持ちで動いていたのだと想像します。ただ、宮本さんの面白いところは、記録された言葉がものすごく美しいんです。読む人の想像力を飛躍させるところに、記録を超えたなにかがある。もしかすると、このあたりは、同じ問題と表現に触れていて潮流の一部かもしれない。

山崎：宮本常一は民俗学の中では柳田國男と比較されて、異端児みたいにみなされることもありますが……。

下道：「あそこに書かれたのは事実じゃない」と言われることもありますが、それは記録と表現のバランス感だと思う。どこまで自分が記録し、どこまで表現に挑戦するか。

mamoru：川瀬さんの態度でいうと、コミュニティに介入していったときの自分の存在を、「おい、川瀬」みたいに字幕として確信犯的に残している。実際に、そこにも文化のあり方が映像化されているし、映像を見た人達の反応さえもその文化がもたらすものだ、という意識が感じられました。

山崎：ロックミュージシャンのコール＆レスポンスじゃないですが、そのやりとりの中で表現したい……。

mamoru：「僕が愛してる文化はそこにある」と仰っていました。そこでしか表象し得ないものに愛を感じておられる、僕は表現者の態度としてものすごく共鳴するものを感じました。

山崎：映像に対する視聴者の様々な反応を、撮影／調査対象のさらなる理解に役立てて、世界を読み解いていくことを重視していると言ってましたね。

外に開かれたアウトプット

下道：あと、研究者の論文というのに触れる機会は一般的に言って少ない気がします。小泉文夫さんは、修士論文として『日本伝統音楽の研究』（音楽之友社1958）という素晴らしい論文を書かれていますし、それ以降も論文は発表されているのですが、同時に一般向けに書かれた書籍やレコードなどを積極的に出版されていました。*

mamoru：ナイル川流域でのフィールドワークをもとにしてつくられた『ナイルの歌』（ビクター、1964）という“本とレコードの間のようなもの”を見せて頂いたのですが。これが、めちゃくちゃかっこいい。そして百科事典の様な本格的な装丁を見た瞬間に何かが分かった気がしました。カタログの様な本格的な冊子があって、歌の解説やフィールドワークの様子を伝えている。6枚のLPはオープンリールのテープレコーダーで採音してきた音源が元になっている。

下道：フィールドノートや写真が入っていたりして、たくさんの人に届けることの意識を強く感じました。もちろん論文も人に届くものだと思いますが、もう少し投げ

方が違う。

mamoru：記録と表現でいくと、レコードにして誰かがその歌を聞くという可能性を残したことで、はじめて記録としても意味を持ったんじゃないかと思ったんです。

山崎：小泉さんは自分が社会から得たものを、もう一度社会に返そうとした人ですよね。

mamoru：論文としてガラスケースに留めるというよりは、連綿と続いている文化を生きた状態で残す。たとえばレコードにすると、僕らの想像を越えたオーディエンスが生まれる。そこに可能性を見いだしていたんじゃないかなと思いました。

下道：記録と表現のバランスでいうと、より表現寄りなのは小説家かもしれません。原田マハさんは小説家で広く一般大衆に向けて表現されている方です。そういう点では、学者とか芸術家とも少し違うと思います。そして、取材をして史実を元にした作品もありますが、これはたぶん記録ではないですね。彼女の言葉だと「『こんなことまでやって許される!』というフィクションの世界は、ずるいと思うけど、恵まれていると思う。研究者の論文では、ウソは絶対に許されないでしょ。フィクションの神は作者なの。ただ、責任はすべて作者が引き受けないといけない」と話されていたのが印象的でした。
　この世界にもう一つ新しい世界を言葉で産み落とし、それが読み継がれていく。お話を聞きながら、すごく幸せなお仕事だなと思いました。

―――――――― そこにある物の力を信じる

山崎：郷土菓子の林さんですが、フリーペーパー『THE PASTRY TIMES』を再編集するかたちで最近本を出版されました。彼は「本とか自分の活動を通して、一人でも多くの方が現地に食べに行ってくれれば一番嬉しい」と言ってるんですよね。mamoruさんが小泉さんのレコードを聞いて、mamoruさんの中に種のようなものが植え付けられたように、誰かのリサーチが、誰かの心や体の中で芽吹いていく……。

下道：「トルコのお菓子を日本でつくっても、日本で食べてもらうんじゃなくて、むしろトルコで食べて欲しい」と言っていたのが印象的でした。

ジョイス：「トルコの暑い、がやがやした雰囲気の中で食べるからおいしいと思う」って。

山崎：林さんは郷土菓子を「時代の先を行く宝飾品のようなものではなく、それぞれの土地が培ってきた生きる力の溢れる存在」と書いています。

mamoru：たとえばフィールドワークをして、アート作品をつくり、どこか違うところに持って行ったときに、どうやって見る人が自分と同じくらいの発見をしてくれるか、ということがあると思うんです。それに対して、彼は明快に「現地に行って食べて欲しい」と。僕も共感しました。

下道：そうねぇ。僕が絵画ではなく写真に転向した最初の理由は、やはり目の前の風景が面白くて、自分がなるべく手を加えず「まなざし」を共有したいと思ったから。ただ、写真として切り取っている時点で、僕の手は加わっている……。川瀬さんの言う「記録と表現」のバランスですね。そのせめぎ合い。さらに、写真では僕がリアルに体験したこととは別の表現になる、そこにフィクションの可能性が出てくる。

mamoru：フィクションといえば、広島市現代美術館で開催中だったドリス・サルセド展に出品されていた平面作品について。僕はてっきり巨大なインスタレーションとして作られた作品の記録写真だと思っていたんですが、キュレーターの神谷さんが「あれは全部CGなんです。写真でさえない」と仰っていました。実際の作品はあまりに大きすぎて無理に写してみせるよりも、その展示や作品を体験できなかった人々にむけてCGというフィクションを使っている、というお話でした。

―――――――― バラバラにして組み直す

山崎：今ので思い出したのは、高山さんですよね。高山さんはリサーチをしてオンサイトにあったものをオフサイトに持って来ると言っていたじゃないですか。リサーチから持ち帰って来たものを、もう一度“切断”すると。

下道：「“切断”して、リフレームするのが仕事だ」と。

山崎：それでいくと、私たちのアウトプットって、この膨大なインタビューを起こして、ひと文字、ひと文字アウトプットすることなのか？　という話になりまして。実際にこの場も一つのアウトプットなんですが……。

下道：そうなんです、実はこれまでのトークは台本に基づいています。テーマを決めてアドリブで話すのではなく、旅で得たものをそれぞれ書き起し咀嚼して、再構築し組み立てなおしてみよう、と。自分たちの表現として、今回旅をしたことをどうまとめるかを考えたら、こういうかたちになったんです。

mamoru：このトークが始まるぎりぎり前まで台本を編集していましたし、いまこの状態もまさに編集中。

下道：『Spectator』の青野さんがすごく面白いことを言ってました。「ただの事実を並べたログだけでは表現にはならない」と。ログって言うのは時系列の履歴だったり記録のことです。本当にその通りで、このトークイベントもログと編集作業とを両方見せようとしています。

mamoru：つまり、これは“ライブ研究開発”なんです。

下道：さてさて、ここからは、一緒に旅をしたメンバーがそれぞれ何を受けとったのかを聞いて、まとめにしたいなと思います……。

（暗転）

〈加藤、立ち上がり舞台へ、スポット照明があたり話し始める〉

加藤：ありがとうございます。
トーク中あまりしゃべりませんでしたが、いつものように記録係という感じで、半分内側、半分外側にいる感覚でした。こういう感じ、嫌いじゃないです。
今回の旅で印象に残ったのは、広島市現代美術館の神谷さんのお話で、「アーカイブとは捨てない作業で、キュレーターはそこからフォーカスし、セレクトするひと」「記録はある一面しか残せない。完全なアーカイブというものはないからこそ、忘却していく中でなんとか留め、まとめようとする」という言葉でした。
もちろん、すべてをアーカイブすることは出来ないのはわかっていたことだけど、神谷さんの話を聞いて、改めてアーカイブをし、自分自身の視点からまとめていくことが大事なのだと実感しました。

〈加藤、舞台袖へ〉
〈山崎立ち上がり、舞台へ〉

山崎：まだまとまっていないのですが……。私の作品や表現の根本には、“記録と記憶”ということがずっと横たわっています。ある時期までは、その人が記憶していることが事実と異なっても真実では有り得る、というところを重視し、自分自身も主に“記憶”にフォーカスして作品をつくってきました。でも、あるときから記憶の曖昧さとか、節操のなさを感じるようになりました。
旅の後、民博の川瀬慈さんから教えて頂いた『消えた画クメール・ルージュの真実』(2013)と『おばあちゃんが伝えたかったこと〜カンボジア・トゥノル・ロ村の物語』(2011)を見る機会があり、この2本に『アクト・オブ・キリング』(2012)も加えて、記録・事実・記憶・フィクション・表現とは一体何か、映像業界のどの分野で上映するのか、ということも含めてダイナミックな状況があることを知りました。3本の映画を見た後、旅で出会った方々の様々な表現形態にいくつかの共通点を見出しながら、次にどうやって表現しようかと思い続けています。
その「次」へのヒントとして心に残るのは、『Spectator』の青野さんです。青野さんの取り上げるテーマは禅や身体など、必ずしも現代的ではないかもしれませんが、それらのテーマは何年も青野さんが携えてきたもので、その都度、現在と結びあわされる、ということなんだと思います。というか、現在の青野さんのインスピレーションが、過去や事実に光を当て直し別の側面を見せてくれる。普遍的な核心にあるからそういうことが何度でも起こり得るんだなと思いました。
もう一つ、旅ラボのリサーチが始まった直後から、自分の創作活動を続けつつ、美術家やダンサー、パフォーミングアーツのクリエイターのためのドラマトゥルクになれないかな、という気持ちが強くなりました。リサーチャーや相談者になって、深めたり、調べたり、穴を見つけたり、伴走者みたいな仕事ができたら面白いんじゃないかな、と。秘密の箱を開けて、それを自分と結びつけていく喜びを旅ラボを通して実感したからだと思います。

〈山崎、舞台袖へ〉
〈ジョイス立ち上がり、舞台へ〉

ジョイス：私は雑誌の編集のアルバイトをしていて、取材先を調べて、質問を考えることも仕事の一つなんです。私の考えた質問は新聞記事っぽいと言われたことがあって、自分が相手に興味を持ってる姿を見せないと、本音を教えてくれないよと言われた事があったんです。それで旅の後半に出会った川瀬さんの言葉、「リサーチとは人を愛することだ」と、青野さんの「会いに行く人は好きな人」という言葉を聞いたときに、「それだ」とひらめきました。
今回の旅で出会った方々の話を通して、人に対する愛が足りないというか、うまく愛や敬意が表現できていないなと思いました。
私は言語の壁もあって、インタビューの内容がわからないところもあって、もっとちゃんと理解できたらもっとインプットできたのになとも思いました……。普段はこのようなメンバーに接する機会が少なくて、こうして一緒に旅に出て、一緒に考える時間を頂いて、すごく新鮮な経験でした。最後になりますがこの2ヶ月、そして特に旅が終わってから今日までの最後の9日間、車中の会話もふくめて、頭も心もいっぱいの日々を過ごしました。ありがとうございました。

〈ジョイス、舞台袖へ〉
〈mamoru、下道、丸山が立ち上がり、舞台へ〉

下道：じゃ、もう編集後記ですかね。
僕が印象に残っている話は沢山あるのですが、その中でも特に印象的な話として、広島市現美の神谷さんが昔参加し、消滅した企画展の話を。
これはアメリカのニューミュージアムを始めとした複数館で開催を計画し、世界自然遺産を守るために実際に世界自然遺産に作家を送って、作品をつくってもらうという壮大なプロジェクト。オラファー・エリアソンがエチオピアに行き、マーク・マンダースがベトナム、その他にもキム・スージャ、タシタ・ディーン……という豪華なラインナップです。まず、作家たちが世界遺産に下見に行ってきた。でも、帰ってきた彼らの何人もが口を揃えて言ったのは、「欧米人が珍しい場所に行って、作品をつくり、さらに地元の人たちのためではなく、なぜアメリカで展示をしなければならないのか?」という矛盾。
さらに、ヘリテージサイトは“人が行かないから美しい”。困ったことに人が行き出すと壊れてしまう。でも、それらがワールドヘリテージであり続けるためにはメンテナンスにお金が必要だったりする、そのための助成にこのプロジェクトははじまった……。
素晴らしい場所に素晴らしい人がいけば、素晴らしい作品ができるというアイデア、西側中心の思考でアーティストを送り込んだのだけれど、予算、運営をはじめ様々な矛盾が明らかになり、途中で止めることになったという話。
やはり、民族学／民俗学やフィールドワークというのは、基本的にコロニアリズムやナショナリズムとともに発達してきた。民族学者が調査で見つけたものは異文化を支配することに役立つ。実際宮本さんも戦中に満州に調査に行こうとしていた。結局行かなかったけど。個人的な情熱を利用されたり、何かが壊れてしまったり、大きな別の力と連動しやすい。でもただただ怯えて批判ばかりしてても仕方がない。何か矛盾を感じた時に、無視したり拒否するのではなく、どのようにユーモアを持って軽やかに対処できるか。これからも色々な表現活動をされている人に会いながら、自分なりのバランスを身につけ制作して行きたいなぁ、と思います。

mamoru：僕は最初にも言いましたが、グループワークの可能性とか、どうやってチームが出来ていくのかに関心があった。また、全体のまとめ役でもあったのでメンバーの様子をずっと観察していました。主なインタビューはだいたい下道くん、時々僕やあみちゃん（山崎）が主導してやっていた感じでした。大阪でカレー屋さんにインタビューした時は、僕とノロとジョイスの3人で行ったのですが、僕が黙っていても2人が半身乗り出して質問してくれた。車中の会話も徐々に盛り上がってきて、そういう変化が見られたのは面白かった。
もう一つ印象的な場面を紹介すると、レンタカーを返却する前に「この車ってこの後どうなるんだろう?」って車中で盛り上がったんです。それで、返却の際にノロが「乗り捨てたレンタカーって誰かが返しに行くんですか?」って粘り強くお店の人に質問をしたんです。そうすると実は全国に業者がいて彼らが高速を使わずに元の店舗に返却して、その分を儲けにしている、という話を引き出すことができた。「へー」とみんな思ったわけなんですが、そこへ下道くんが「返却する車に同乗したりとかって出来るんですか?」という追い込みをかけて「それは別の観光系の免許が必要なんで無理ですね」という答えが返ってきて、本当におかしくてみんなで笑ったけど、僕は同時に感慨深いものを感じたんです。というのも、今回「フィールドワークと表現」というテーマを掲げ、リサーチ手法やそのアーカイヴの「研究・開発」という使命も帯びていた。もちろんそこが本筋なんだけども、僕たちはあえて「旅」という手段を選んだ。明確な目的地に向かう効率優先の「移動」ではなくて、旅先でたまたま出会っ

た人から得る言葉だったり、知らずに訪れたどこかで巡り合う風景のような、そういう発見も「目的」に含めたかった。僕自身はひょっとしたら、むしろその「何か」というのを一番期待してたかもしれないなって思っています。ちなみに、ノロがレンタカー屋さんで質問を開始する瞬間に僕はレコーダーをまわしたし、あみちゃん（山崎）もレコーダーをまわしていた。たぶん質問の内容もその答えもかなりどうでもいい事なんだとは思いつつ、何かが録れる気がしたんですね。こういう事を繰り返しながらそれぞれに何かを得て、チームとしてもパフォーマンスが上がっていくんだな、という事を感じた。それが今日のトークの「リハーサル」になっていたはずなのですが、みなさん今日の「本番」はどうでしたか?
下道：このトークは今日のライブだけではなく、この後さらに紙媒体にしてたくさんの人が読めるもう一つの表現に持って行きたい、と思っていて。

mamoru：このプロジェクトはここが終わりではないですよね。丸ちゃん。

丸山：そうなんですよね、トークの終わりがプロジェクトの最終地点ではないんですよ。デザイン担当の僕にとってはここからが正念場です。
　先ほど、このトークも「ライブ研究開発」という位置づけがされましたが、そもそもリサーチも編集も、もちろんデザインという行為も、それ自体はライブで公開するようなものではないと思うんです。つまり“最後につくられるものしか出さない”。しかし、「旅」という、それ自体に余白がある時間をチームで過ごし、リサーチも編集も同時に行ない、デザイナーとして現場にも関わりながら、ライブ的にものをつくっていくというのはすごく楽しかったです。冒頭の挨拶のところで森さんが、「既存の方法論ではなくて新しい方法論を探し表現していくこと」と仰っていましたが、旅する行為自体が研究開発となっているこのプロジェクトを進めていくことで、普段なかなかできない経験ができて、様々な発見がありました。そこから得たものを僕たちなりのアウトプットに転換させて、この場に居ない皆さんとも共有できればと思います。

mamoru：最後に、このプロジェクトに関わって頂いた沢山の方々に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。インタビューを受けてくださったみなさん、旅先でお世話になったみなさん、台風が迫り来る中でトークイベントに来てくださったみなさん、TARLスタッフのみなさん、裏方を買って出てくださったみなさん、そしてこの文章を読んでいただいたみなさん、本当にありがとうございました。色々とご意見があるかとは思いますが、これで私達の「旅するリサーチ・ラボラトリー -フィールドワークと表現-」を終ります。

（会場暗転）



*09の小泉文夫氏に関する発言に関し、トーク時に事実と異なる発言がありましたので訂正した内容を掲載しています。

［取材協力］敬称略
尾形暁子、山口拡、田村友一郎、金本豊、徳毛敦洋、高木泰伸、町野珠美、宮地明子、南野佳英、久保拓也、岡本純一、児島雄一郎、東京藝術大学小泉文夫記念資料室、武蔵野美術大学民俗資料室、久賀歴史民俗資料館、周防大島文化交流センター、広島市現代美術館、国立民族学博物館、有限会社丸山珈琲
［編集協力］
影山裕樹、ヘメンディンガー綾、伊藤由実、茂木久美子

東京文化発信プロジェクト

Traveling Research Laboratory

旅するリサーチ・ラボラトリー　-フィールドワークと表現-

近年、アートの現場において、アーティストによるリサーチをもとにした様々な作品が制作され、フィールドワークという言葉も本来の学術的な枠を越えて定着しつつあります。このラボでは、フィールドワークをベースとした作品を制作・発表しているアーティスト、mamoruと下道基行が、デザイナー丸山晶崇や公募により選出したリサーチ・アソシエイトと「旅するリサーチ・ラボラトリー」を結成。6月後半～8月初旬の約2ヶ月にかけて、作家や研究者だけではなく、独自のフィールドワーク的手法とアウトプットを実践している方々を訪ね、インタビューを行い、そのリサーチの過程を1つの旅としつつ、フィールドワークと表現の可能性について検証しました。



企画・監修：mamoru（サウンドアーティスト）、
　　下道基行（美術作家／写真家）
デザイン：丸山晶崇 [circle-d]（デザイナー）

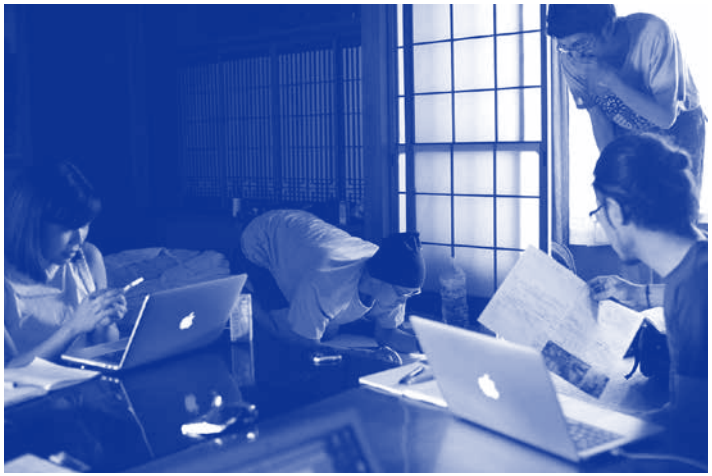
リサーチ・アソシエイト：加藤和也、山崎阿弥、ジョイス・ラム
東京文化発信プロジェクト室：森司、大内伸輔、芦部玲奈

mamoru（サウンドアーティスト） **www.afewnotes.com**

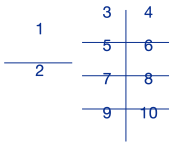
1977年大阪府生まれ。身近な物や日常行為から生まれる微かな音をとりあげる「日常のための練習曲」、様々なロケーションで過去ー現在ー未来／架空の音風景を現地でのリスニング、模倣観察、アーカイヴリサーチ、インタビューから書きおこす「THE WAY I HEAR」シリーズを発表。「聴くこと」から知りうる世界を提示する。近作に、明治初期に来日したアメリカ人鉱山技師B.S.ライマンの北海道地質調査を取り上げた「THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN」など。

下道基行（美術作家／写真家） **www.m-shitamichi.com**

1978年岡山県生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。日本国内の戦争の遺構の現状を調査する「戦争のかたち」、祖父の遺した絵画と記憶を追う「日曜画家」、日本の国境の外側に残された日本の植民／侵略の遺構をさがす「torii」など、展覧会や書籍で発表を続けている。フィールドワークをベースに、生活のなかに埋没して忘却されかけている物語や日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで視覚化する。







1. 淡路島の宿で編集会議　2. 車内で次の取材の話し合い　3. 淡路島でフィールドワーク　4. 広島市現代美術館にて取材中　5. 大阪の宿で朝からデザイン作業　6. 周防大島文化交流センターにて宮本常一さんの蔵書を見せて頂く　7. 淡路島の無料野菜販売所を見学　8. 青野利光さんにお話を聞く　9. mamoru仕事中…　10. 大阪の宿「ゲストハウス タイコたたきの夢」







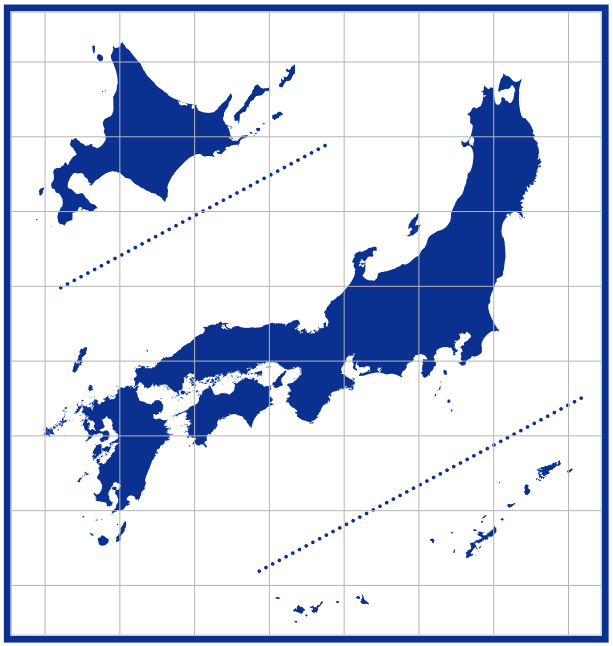


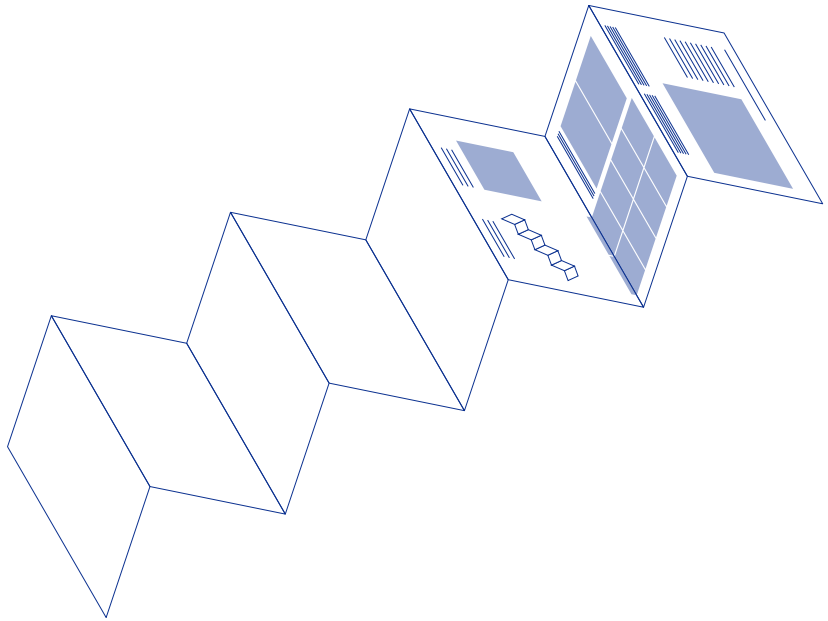












表面は日本地図とラボの移動ルートとインタビューをした人々の詳細。裏面は2014年8月10日にラボの成果発表報告会として行なわれたトークの内容の書きおこしをもとに加筆・修正したこのプロジェクトのメインテキスト。

9日間の旅中に全員で記入したノート。左側には行動記録を時系列に、右側には車や宿で話された会話や思い出等を書き入れた。記録からこぼれおちるものを中心に。

Tokyo Art Research Lab（TARL）
アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。
http://www.tarl.jp

主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
企画協力：一般社団法人ノマド・プロダクション
発行・お問い合わせ：公益財団法人東京都歴史文化財団　東京文化発信プロジェクト室
Tel:03-5638-8800 ／ E-mail: info-ap@bh-project.jp
http://www.bh-project.jp

山口

24 Thursday

0 15 30 45 60min

メンバー6人。それぞれの道で山口まで。
そして旅スタート!!

下道は。
3日前まで、山口の秋吉台で写真の合宿があり、ひとり合宿をしていて、そこから、山口市内へ下山した。

(1977年(37才)
日村さん 富山出身 ・丸山町
(映像作家)
・写真を直接に使わないが、写真をベースにした作品。
・無意味なものに意味をはりつく

google street view.

山崎は、1/23 9:00に新宿出発。
高速バスで新山口着。JAで一通り
新山口→湯田温泉、温泉に入り
地鶏を食べ、YCAMでmamoruと合流
展示、ツアー(日村氏)に参加。

丸山
5:49 国立西八発。
7:40 羽田空港発
9:15 山口宇部空港
山口の印象。二条会のアトリエ
AUTOMANでの打ち合わせ3人
CAPIME COFFEE土ち寄り。
16:20。宿に到着!



(機内)
9:40 — 羽田発 (JAL)
11:60
12:33 宇部空港
12:10 YCAM

mamoru

風が強く むせかえる暑さ、晴れ
雲は厚く、夏の空

惣野旅館 ご主人

:40 ジョイスノ着

:20 m. みち。
カメ. fun着.

:54 10着! シーティング

:48 貴well (合唱はお客!)

:58 懇親会に参る。
(写真はそれぞれ)

:17 Tsutsuya

:30 日村さん来た

:41 亀石様!

:50 津田さん来た。

:40 土屋さん(YCAM)来た

:04 日村さんがYCAMで展示中の作品の説明
(ニオ号試しーつ人のラボラトリー)

:06 不快開こえる。

:35 津田さん・スタッフさん・土屋さんが帰る。

:35 丸山ごと

:10 お金!!

惣野さんからヘンそうって

ジョイスノ。19日から
宮崎の青島で合宿…
白井:別府など回って今日
午後電車で山口に来た。

ちょい東京にもどれた…

惣野旅館の風呂
・おじいちゃんの耳が遠い。
・明治からつづく古さ。
・1人1本冷えたビールを持ってきてくれる。

山口県立山口図書館
山口県文書館
Yamaguchi-kenritsu Yamaguchi Toshokan
Yamaguchi-ken Monjokan
惣野旅館
やれんが

← 川奇沿いの
団地のあるエリア

駅前で祭りがあった。
まさかこの後も、さまざまな
場所で祭りと
ニアミスをし続けることに
なるとは。

Nより
仕事が終わらず、予定を変えて
21日に大阪入り。
23日 徹夜して、新幹線に飛び乗って
みるき、山口→新山口を勘違いして
通過しました。すみません

ご搭乗券
BOARDING PASS

マルヤマ マサタカ様 117

行先 DESTINATION 山口宇部 YAMAGUCHIUBE
便名 FLIGHT JAL1643
搭乗口 GATE 5B
出発時刻 DEP. TIME 07:40
搭乗日 DATE 7/24
座席 SEAT 39K
運航 operated by JEX

保安検査場/搭乗口でバーコードをかざしてください。
SCAN THE BARCODE AT SECURITY CHECK AND GATE.
保安検査場は15分前までに通過してください。
F01C

いま、そのペンで書いているのだが、イヤやら、このペンは、惣野のおじいちゃんが、若いヘンのうりこみのトに少し夕ざされて住っていたストーリーつき…少しせつない…

山口 → 広島

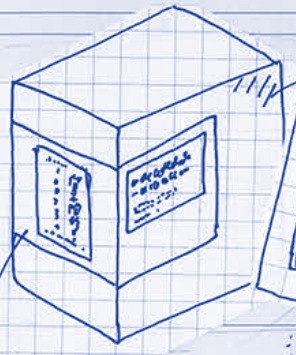
25 Friday 快晴、暑いけど暑い





石風呂からコウモリ

0 30 45 60min





オリジナル到着

来訪している著書などもデザインしろうるが"とてもいいかんじ!



引き出しが内型ゴムでトラックがGOOD!

日本ハワイ移民資料館.
時間がなかったので室内をしてもらい見学.
実際に使用されていた石造釜がなりよかった!
(出りまちがえた)

NTTうみのプレー

:03 車来た
:11 出発…
:12 出発!
:13 フール
:18 出発!
:24 山口高人 → 山口駅へ
:25 Briefing (マツノ書店)
:46 新山口駅へ
:54 トヨタレンタカー
:59 出発

:19 周南市 金魚座 周辺 マツノ書店 :34 松村好久さんとインタビュースタート

:41 年賀をもらった

:10 書店へ
:12 出る
:18 出発
:36 下松SA (は宝を買う) 出発
:44
:48 ALOHA 周防大島
:53 日本ハワイ移民資料館着
:57 ぜひを通りすぎた

米

:17 資料館を出る
:42 久賀 歴史民俗資料館着 → 僕もん

:02 金子みすゞ通り
:08 金本屋 それから周辺説明など
:59 資料館を出る

:03 「ありがとう」
:04 久賀石風呂
:09 「ありがとう」
:33 周防大島文化交流センター着
:40 資料説明など
:26 宮本常一のふるさと → 書斎に入る

:01 書斎を出る
:09 ありがとうございました
:22 文化交流センターを出る
:33 カヌカ
:39 TARL名兵
「ちょっとしたドラえもん」

:00 出発

:05 ~帰国~

:54 Backpackers Miyajima着

:34 ほか注文
:40 ミーティング

ネオオーズ焼き



ハワイに移民に行った人が成功して島に帰ってきて、たてた建物がつかわれている。島には他にもそのような家がのこっているが時間をとめている

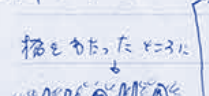
コモンルームで夜、絵葉書作業
地図やパソコンで、地に印をつける。
リラックスの用図で

差出人 幕末維新史料出版・古書売買
マツノ書店
〒745-0032 山口県周南市銀座2-13 TEL0834-21-2195

米着いた時にシャッターが1/3だけ開いていた。ちょっとしたウェルカム感

8:06 下道が、ケイタイ電話をレンタカーのお店に忘れて取りに戻ったが、カバンの中にあった。

車窓から…
山口市内、ガードレールが黄色いなんでだろうとそうぞうしてみる。
山口市 町の花はオレンジ色



招をわたったところに

11:14 徳山のパーキングにとめていた。レンタカーはチンチンにあつくなっている。おしぼんがドアをバタバタする。





12:28 下道ぞいは、ちらちら少し動くものはずっと見ていられるよねと言った!

大島 海がキレイ!!となったけれど、浄水施設があんまりいない。

乗車券
山口 → 新山口
経由:山口線
7月25日から 1日間有効
下車前途無効
¥240
山口駅 7.25 入鉄済
26.-7.25 山口駅@1発行
40284-02 (4-) C03

インタビュー前、mamoruと下道のトイレ待ちの間、マツノ書店のある銀座通りについて「銀座本仕掛け」「両替商のあった所は金も取って名前が残ってるよね」

インタビュー帰り 1件の古書売り場では
小さな音量でノラ・ジョーンズが流れていた
カウンターには奥さん (4代目)

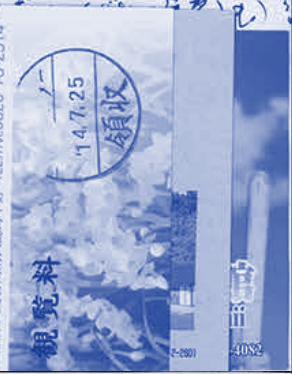
おなじみに声をかけられている
「出版引き受けまでまるの?」の問いに「ぬかんないっぱい」と答える。

スカイプ

たくさんの出会い。



・backpackersにて"くま美女"(佐方ゆん) と ボーランド女性に



7

広島

26 Saturday 快晴，暑さも変らず

今日で

0 60min

本当にハードな一日だったし、まだ
どういう風に地図に何を書き込み
ていくのかもしっかりすり合っていなかった
ので、ここでがっつり会議。
ともかく話を聞いた方々、インタビューさせて
もらった方々、
出会った人達の
ご行プロフィールを
書きまくるという ことになり"皆で"分担を
決める。ジョイスには常に「何をかまと録」を
書きとめ、毎日「日報」を事務局に送る。
なかなか終わらない作業は深夜にまで…
その間、からんでくださった日本人1人、ゲストハウスらし
から始空気関に泊まってんの？と声をかけてきた外国人も

Miyajima Backpackers
3階
ジョイス
のうれん
れいれん
あみれん
下道
こうかん
mamoru

:02 海辺の作りのバンガロー
:15 同じ部屋に泊まっている人が激安…
:20 宮島口からフェリー
:40 宮島着
:55 海洋博の厳島神社
:58 集合 → 7-11
:21 神社を出る
:36 清盛神社
:10 松大汽船出航
:21 宮島口着
:25 ホテルに荷
:30 記帳
:40 華びブリーフィング"（神谷さん）
:23 広島駅着
:30 彦もや（肉うどん）
:10 駐車場を出る
:19 広島市現代美術館
:23 ロビーで野村恵一さんに会う
:42 Doris Salcedo展
:40 ミーティングルームに
:50 神谷幸江さんにインタビュー
:40 野村誠の音楽堂
:12 ミーティングルームに戻る
:45 広島駅を出る
:02 READAN"DEAT"
:32 トークスタート（みちるさん）
:27 相手
:16 泣る
:24 華出る
:40 一路福岡
:02 一栄旅館を出る
:10 越田お好み焼
広島さいお好み焼屋で
READAN DEAT のスタッフと
会食。トークの延長戦！
…みんなとホテルでスライドを見る。

朝仟．
駐車場のレンタカーに
カギをさしこむと…
「7月26日．ポッタダム記念日」．
と．機械音でしゃべる．
その後．歴史のはなしになる．

神谷さんは．こちらからの
インタビューにたくさんの．
準備をしていてくださった。
さらに僕らが何を聞き
たいのか．逆にインタビュー
からスタートして．
すばらしい！

宮島にて．
『正直ゼンゼン感じてるって思うけど』
（パワースポットのような）
by mamoru

下道は
ひとり．宿仏のこり．
神谷さんへのインタビューについて．
考える．ぼっねん．
でもすずしい…

お昼
うどんの
乃きや
6人中．肉うどん5人
おろしぶっかけ1人
＋ど衣 ← 1つ
皆さいたまる。

（能舞台に
感じ入りました

聖日が年に一度の玉取り祭りだと知る．
ここで"とく深り当日"をかすって
参加こーます。
おみくじ：1口こる．ジョイスがドクロ"凶"

大阪の不在を感じられる．Takuのサイズ"は coffin と同じ"
すばらしい！！ 耳music。

車内にて．
うどんてしばの話
→ 土芸作りて
工経がほんど
いっしょ．ゆん

流されていた video の中に
"experience"という言葉の語源を辿る
シーンがあって"ex→explore 越える
"Periri→danger 危険"

インタビュー後．学芸室でコーヒーとか菓子とかいただく．
神谷さん以外の学芸員さんたちと話し、
広島の宿泊場周辺の食事情を教えてもらう．
「旅ラボ」のチラシを学芸室のロッカーに貼らこくれた．

mamoru 曰く「3年前の下道とは
比べものにならない、成長ぶり」と
トークの向上に感心する．

"マイクの使い方は
オレが教えた。"
by mamoru

めっそうもない
（mamoru さん）

オープンしたばかりの本屋さん．
店長さんは地元広島の素敵な本屋が
なくなったことで．自分が本屋をつくってしまった。
下道が写真集の新刊で出会い．
「本屋の作り方」というテーマで．インタビュー
＆トークイベントを開こい。客さん20人程。

トークに途中から参加した重度の設計者い刈内さんが
宮島でみつけたカフェの設計者でもあることを知る

/倉川俊さんの
"太陽のリレー"
を流してご。





大移動の日

広島→京都

「7月27日 政治を考える日」 by カーナビ

Sunday 27

15 30 45 60min

7
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

:24 お店を出る
:37 一条旅館に帰る
:18 出発
:11 岡坂SA
:43 岡坂SA を出る
:41 吉備SA
:51 吉備SA を出る
:04 三木SA
:18 三木SA を出る
:16 平倉PA ガソリン
:11 海岸寺 あみだつ
:48 お店を出る
:02 平倉PA 立志行大学ギャラリー・アクア
:37 出る
:49 フクやん牧場店 (American Boyfriend)
:14 出る
:27 ゲストハウス トンボ
:13 出る → 鶴川で豆腐、東山風呂
:26 下鳥神社へ
:27 くびえもん
:41 乾杯~
:34 トンボに帰る
:08 くびえもんを出る

車内6時間

広島~京都の6時間: ずーっと小さな空間でいっしょにいるから、いろんなコトが話せる。

道 「昨日の神谷さん、おもしろかったねー。」
あ 「うん、「古典」を「個展」とまちがえる~」
道 そうそう。「個展には予算と期間が…」
あ …って、神谷さんが言ったとき、ひらめいたよね! リサーチには パトロンが!!
道 宮本常一と渋沢敬三!
あ うんうん 今日政治の日…
あ! 町中育栄は!?
各都道府県から出てくる議員=リサーチャー!
政治=アウトプット!
あ! 吟遊詩人は?
道 いいね!
あ 購入者がパトロン… オイシックスとか? 売れない農産物をリサーチ、販売!
道 おおお! あ! ドメソの解説! 何年も赤いと聞いて育ってきたけど、赤マントと黒バットが!!
道 せめぎ合い、絶対「食」を入れたい! 林さんと丸山さんに会いたい!!!
道 (下道運転中) 2組ほどに分かれて話していても、お互い何となく聞こえる。
道 車内上から見る図
楽屋だ!!!
m 席替えしたらおもしろいかな…
のろ、意図的に席をシャッフルするから、ふかん図のメモ、ということ。
了解!!

政治の日になんで
日本の政党や党の出す新聞について討論。

道とあみのこの会話を聞いていて、8月10日下道のトークの様子がふと想像できた。ということは…。

様々なリサーチについて話す
・町中育栄 → 全国の議員の地元から情報とすい上げ → 政治
・オイシックス → 郵便(小農家)のリサーチ → 販売
・パワースポット …… みたいな、脳を陽を反てん上げるための。

素朴な疑問
インターチェンジとジャンクションの違い
» 出入口
» 分岐点

mamoru 兄の誕生日
↓
「サラダ記念日」
↓
アンモニュメントについて。

8月10日のトークが本番だし するならこの車中は リハーサルになっている又は楽屋。"

普通の話。

下道による。イングリッシュ普請
↓
花咲爺さんとももスルが "peach boy"

下道の英語は俳句みたいだね。(カタコト?)

信じられない涼しさ ほとんどで汗をかかない?

アクアで展示替えで見たかった映像を見てもらう。その時たまたま出会った辺口くんも一緒に見た。

車内は長時間狭い密室で、モノがあって自覚した日であった。過ごすという ある種、特別な時間を共有することによって、生まれる

かもね (かもなぁ)

雨の山陽道 → 中国道

19:58 京都着。

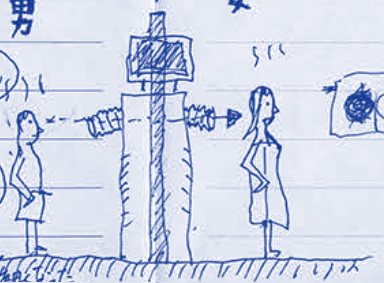
夕食を相談している時。
「絶対参の食」 by ジョイス
→ 「なぜ京都なのに中華料理?!」
⇒ くびえもん 大葉御前 におちつく。

* 明日の宿泊先がようやく決まる
行き先:淡路島!

お祭りだった

山口でも宮島でも祭りとれ違ったばかりだったので、下鴨神社でちょうどみたらし祭りをやっていることを知り、ジョイスが何かあるかもしれないから大鳥居で下鴨神社に向かう。京都の夏の夜は涼しい。ほおずきの屋台もきゅうり、せんべいなど祭りっぽいものを食べまくる。下道先生、mがそっと回ってホルンゴ会場に行ってしまったが、あみ、のろ、じょいろう人は餌が消滅地みて待っている間にかるもんの広いバナを開かせてもらった)、ロウソクを持ったまま池を渡り火も洗った初めてだったねとしみじみ(?)大鳥居。カメンパシャパシャ。居酒屋のくびえもんも居酒。クイズ!のTKのおしかった!

トンボに帰ったら先生たちが宝探り保険談を開いて盛り上がっていた。



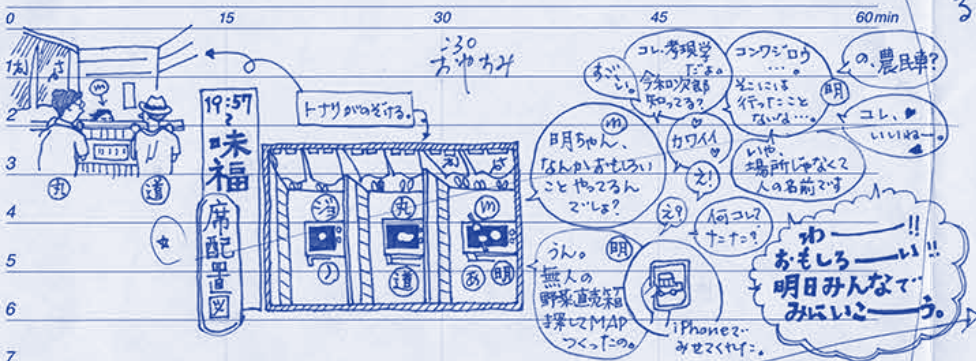
トークイベントを車内!楽屋のようなものにする

安居酒屋っぽかったが意外とウマイ? (そしてビールの泡がキレイ。) ~mamoru

宿の近所は出町柳というエリアで。
8/1にインタビューをする「spectator」2013春号。特集「小商い」でおすすめされていたお店が点在。レンタサイクル最でかね。

7

28 Monday



:00 トンボを出る
:12 「菜の葉の日」
:21 恵文社を出る
:17 天一を出る
:25 6人で集合
:43 恵文社
:40 天下一品総本店
:49 西宮名塩SA
:04 SAを出る
:10 野島断層保存館
:03 保存館を出る
:13 大阪湾岸道路
:25 郵便局1日開百貨に寄る
:32 →イオン
:09 丸山式ネコビーチコーシング挑戦
:30 ビールを出る
:57 味福(お好み焼屋)に着く
:19 お宿を出る
:20 ゲストハウス赤野
:07 Lawson
:50 草に着く



5時過半頃に宿の横を通る電車が宿全体を揺らす。その後

下道は2回その音を聞き二度寝へ
Jロは3回その音を聞き二度寝
mamoruは10回その音を聞き二度寝
丸山はその音を聞かなかった…

天一へ行きたい下道が
僕たちにラーメン食べる前に
水分をもっていく。

半分以上の集客を会話は
車で行っていると思えば納得もいく!

みんなは今井俊介のようなしましまの服を着ている

下北沢の
鮮やかな巣と
おしゃれ花を見かける

車内トークのながれ…

12:44 風が吹けば桶屋が儲かる

→ 関白宣言

→ 神道の話(習慣・価値観)

ジャスコ、当店の駐車場は
ドアを開けてくれない。

現物をその場所で聞き方表明。。

Tea Pastry Collection」を購入(林周作著)



ネーミングセンスが…

「グラグラ"ラボ"」で
震度7と余震を体験会

町の商店のおじいちゃんに
「行ったことがない」。
できるときに議論が
おこったと、当日寺を
ふりかえった。
加古川から来た釣りの
男性(60才)は
「後悔しないと言われている」。

おそば屋のおじいちゃんに
ビデンスをきいてJRを聞くも
はぐらかされ迷
沖本方面へ徒歩で
お祭り(又)の様子
などを見かける。

Jロ初運転。
- Pてまり出す(ふかす)
- リアウィンドウのワイパーが動く
- 前進のときにバックする
- ルイセーム!



7

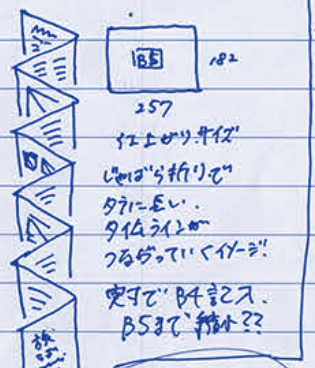
29 Tuesday

決戦前夜

快晴　陽がぼかし　セミがいっせいに鳴きだした。

0 15 30 45

ミーティングの内容。
最終日「刊物の体裁について



:36 ジョイス寝る

ジョイスの書きこみ方に特徴を発見。(こういう風に)『様につなげて見ると面白いよ!』この一言から output への仮説が生まれはじめる。

MTG中 階下から かすかな ウクレレ と歌声(女の子 男の子) ♪ imagine

:13 旅コボ"編集会議"(決戦編)

「食」のことがインタビューで入るといいよね」(mamoru) 3つのインタビューをすると、パターンが見える…?

:17 花野を出る　:21 出発

:03 自宅に着く

:02 自宅を出る

:00 あもれの家 → ちょっとインタビュー

アキエールも生んだ方に「これからどうしたら?」と相談

アキエールの「梅ジュース」がおいしい　クッキーや梅ジャムも。

(あの)は活から見つける→旅に出る→生活をつくる…と、輪かという…?

:36 車に乗る

:51 降りる

下道

"ツアーガイド"ドライブスルーで見れるマート!

:54 車に乗る

:43 近くの公園に駐車スイカを食べ終わって最後車の箱をもらう

:59 あわび

:37 あわびを出る

→ 海から海場

:51 海から海場を出る

:01 ファミリに着る　:08 出る

:22 花野に帰る

:36 車内、寝ほれお疲れまでした。ビブライ

:20 久保さん(インタビュー)が来た → あもれ → 南野さん

:36 ありがとうございました(インタビュー終了)
久保さん、あもれ、南野さんが降りる

↓

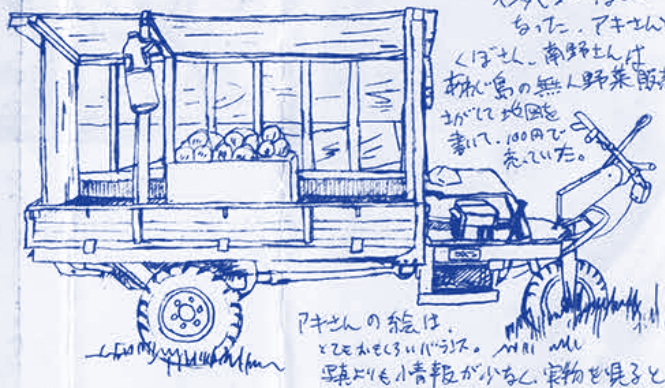
それぞれ おもいおもいの過ごし方。
これな時間は どれくらいぶんだろう。

下道日高にて

↓

☆ 父母かんが "流れ星すごいよ!" "流れ星だって" と言い出して 皆で見に行く!

※しかし下道は222…



偶然にも インタビューすることになった。アキさんと、くぼさん、南野さんは 森林公園の無人野菜販売所を さがして地図を書いて、100円で 売っていた。

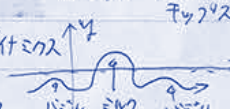
アキさんの旅は、とてもかもくりバリエ。写真よりも情報が少なく、実物を見ると 感動が 湧く

"アマチュア無線の日" のカード

ゲストハウスの娘。美のおこうは(ふたご)一日生まれで 真ごころ なっちゃん(うま)は 夏 から 行うまたちがいよ。

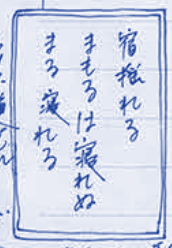
- 謎を日にお盆の頃。お盆に何をするか尋ねると、「バレンタインのチョコを渡す」と答える。
- 甘いお菓子が好きで、何が好きか尋ねると「ポテトサラダ」。それは甘くないよ?と重ねて聞くと、「うん、ポテトサラダチップス」と。

海鮮丼2つ　♡バジルドルチェのジェラート　味のタイトロス
生しらす丼2つ
しかし丼4つ



下道でも車線を忘れる

2:10



mamoruでも携帯を忘れる

25才のともはどうしひとか?
20代で後悔しないで!やっておけばよかったこと!
↓
キーワードは「転機」

車内でジョイスがインタビュー的にはじめる。
ここからでんでん…

ワカメでTARLと描く。

定団さんはスイカを切る包丁をもってくるとき、こそっと口紅をぬって。

TARL

mamoruでも「ぼくらも日吹見しているところ」

「関白宣言」

○ 夕日と海に映る光もキレイ。

寿を迎えたら
下道でも(?)が口笛を吹くと
風が吹いた。気持ちよかった。

到着前に志野清志郎のモノマネをするかが爆笑自分に似てからすご爆笑。

マモル:寝る子の寄わせ!「ここですしを生むなんて、猫当然のオリの中に入れられた子羊に等しい」

夕食



もうひと皿食える
/ロ

7

30 Wednesday

0 15 45 60min

プロレス記念日 by カービ

淡路島 → 京都 → 大阪

吹田SA



:02 朝ご飯
・高代米
・みそ汁
・あじの煮つけ(花野の奥さんが作ってた)
・小鉢

:04 コンビニ

:09 車に戻る

:10 あみさんがbriefing(林さんについて)

:19 本福寺に着くがひもまた閉まってない!

:27 戻ってくる

:32 吹田SA → 集合写真 → :53 出る

:51 寝る出る

:53 社長が休みだ!(全車絶)

:05 La voitureで林さんインタビュー

タルトタタン / くるくるタルト / オペラ

←ネネさん手作りの手縫い菓子

チョコ入 / ほうほうクッキー

:54 お店を出る → 戻ってお土産を買おうとしたが、なかった(は菓子のみ)

:13 茨木市立キリシタン遺物史料館

:07 アウト

国立民族学博物館に着

:28 :35 川瀬慈さんインタビュー

:52 ミニストップで短く昼ご飯

:08 車→出る

:56 オフィスを出る

:48 ゲストハウスタイプたちもの夢に着

:08 ヌンクイ

:29 旅ラブ

:11 お店を出る

:35 あがりカフェで町野さんにインタビュー

:40 あがりカフェを出る

~:40 ナイトトーク

・ジョイスのインタビュアー賞をカムバ
・ノロさんの自車×車×アニメ×
舞台のpoいたこ→川瀬さんと林さんに聞く。

---

mamoru「レンタカー延長します!」 該には変更がつきもの。長野に3泊こう! と決まった時は大阪・堺でレンタカーを乗り捨てて、翌日「青春18切符」でのんびりと気分を変えて電車移動にしようという話だったのだが、なんと大阪から名古屋の一部区間で運休中... 代替輸送のバスはあるらしいが... という事が直前で判明。大雨がにかの影響らしい。じゃあ... 高速バスがる? ドライバーも休めるし良いかもね、とプラン3。そして昨日の夜いざ予約するが、となっていた。全員分でと結構チケット高いな〜、それに車中の時間がかかり重要っていうことから...

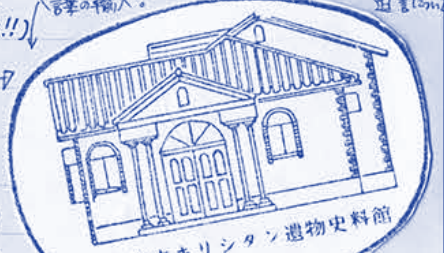
移動中の車内での人との距離感

mamoru「ノロ、レンタカーってこのまま借りれるかな? とりあえず長野までで考えてどのくらい必要あるの? 延長するかもしれないから、明日の朝一で予約して」

ノロ「了解! 値段はそこまで変わらないみたいだしたぶん3泊するんじゃないかなと思う」

(こうして車の旅は続く!!)

車中 高山右近のこと。ジョイスに「キリシタン」や踏み絵について みんなでビクモニ→日本におけるキリスト教徒の弾圧の歴史 迫害について



茨木市立キリシタン遺物史料館

淡路産の花野で〈お土産に古代米を3つ買う〉

車中 全体的に気まぐれに人形と世界三平和観音と厳田の女神と行ってる...

地域とアートについて考えそ...

初同乗

CAR

7人目の旅行メンバー川瀬さん乗る

「エチオピアは第2の故郷」

「着替えは全然持ってない」

「エチオピアに下りると時間から撮り出す」

「金木賞ヘテロトピア賞おめでとう」

「韓国かもいろい」

教員新人研修中 とかふる...

10m²くらいのスペースに7人くらい居てまだ新地? と思ってしまう...

車中 太陽の塔にTARLをせる案。 2つも実物はTより Aっぽい。

BAR2:川瀬さん、下道、丸山、山崎 話す。

川瀬さんの至言「私の境は自分の中にあった」

他人との出会い、「宮さん」の人間力に注目。

リサーチとは、人を愛することだ 川瀬慈

・チーフが起こしをしてくれている
・ヘメンティンガー藤さん(大阪在住)がお合流。
・川瀬さん参加。ヘビにかまれて骨が事でとけた話...

イヤリング入り

レシピ

サラダのソース

タマネギ、EXオリーブオイル
みりん、みつかん酢、
しょうゆ、塩、ゴマ油
バジル、黒こしょう
を、ミキサーにかけて、
レンジでうなあたためる
完成!!



B159

7

31 Thursday

大阪→長野 ボブ・マーリー「ONE LOVE」が朝から流れる。外は今日もあつそうです。

日帰り、旬えクマゼミがカンカン鳴いている

0 15 30 45 60min

1 車中での会話がトークのリハみたいことから、意図的に座席の位置もシャッフルして、いままで座った事のない位置に座ったり、横に並んでる人同士で模になったりしてみよう、ということになり。これぞ"車中稽古"!!

2

3

4

5

6 いつものノロくん助手席を入れ替えてみる。

7

8 丁 丸山 車の座席

9 マ 山下

10

11 車内は1列目から3列目まで声がきこえて会話できるのは

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

次の日にバスで小諸から軽井沢に帰る予定だったが、それぞれ予約ビデオ取ろうと思い、時刻表を調べてみんなに時間を有効活用する。又井さんながらチケットも取ろうとしたら、カウンターの向こうに座っていたmamoruくんにストップ!! と言われて車で長野に移動するなら、軽井沢まで一緒に帰ろう!! と。早速のろもんにレンタカー会社に電話して手配してもらう。車という限られた空間で話すことが今回の旅でとても重要な要素だったのも)認識した。

＊無料どう?

:20 宿泊者コンサルティングセッション

【書き込み作業】

丸山さんは「leaflet」デザイン作業など

:14 タイコたたきの夢

:26 出発 → 長野

:30 タイコたたきの夢を出る

:28 出る

:42 かん張くるみ!

:48 又井さばながおか

:58 出る

:37 トークのタイトルを考えましょう

:39 善光寺SA

:49 出る

:07 屋敷山PA

:23 出る

:26 高坂SA

車内6時間

:40 出る

:50 妻籠SA

:57 出る

:50 1166 Backpackers

:10 打ちそば二本木仙

:20 お店を出る

:44 首つるど

:48

:58 帰る

:07 メンバーで9日間ほぼ毎日24時間ずっと一緒にいて、カンく濃い時間を共有できたことがとっても幸せで不思議な経験だった。(いびきがいっぱい。これを最後の夜にターカイビストがいなかった

物事のバランスを機能する時が。ンカ気持ちを表れなかったように。

早朝 男部屋では S谷氏がガーガーいびきを……。

mamoru 起床 → 1F へ
宿の主人 起床 → 1F へ
あみ 起床 → 1F へ
フンロ ジョイス 起床 → 1F へ
下道 起床 → 1F へ
丸山 起床 → 1F へ
ノロ 起床 → 1F へ

→ ローソン

コーヒー hot / cold まちがえる。

旅ラボは旅人集団であることを再認識 相

「どこか改善する所はないですか?」

「よいアイデアはないですかね」

オーナーのゆういちろうくんから

相談される。

そういえば、今回の旅も、今までも、さまざまな宿にとまってきたし、「このプロジェクトのラストには宿をつくるか!」など フィールドワークと表現の話をする。

地図がほしいとか 共用時間に鏡がほしいとか

タイコたたきのゆういちろうくんのオススメ店「大阪中心部よりも安くて、上手い!!」と追伸していた。

:48 又井さばながおか

:58 出る

:42 かん張くるみ!

:28 出る

:30 タイコたたきの夢を出る

:14 タイコたたきの夢

:26 出発 → 長野

:37 トークのタイトルを考えましょう

:39 善光寺SA

:49 出る

:07 屋敷山PA

:23 出る

:26 高坂SA

車内6時間

:40 出る

:50 妻籠SA

:57 出る

:50 1166 Backpackers

:10 打ちそば二本木仙

:20 お店を出る

:44 首つるど

:48

:58 帰る

:07 メンバーで9日間ほぼ毎日24時間ずっと一緒にいて、カンく濃い時間を共有できたことがとっても幸せで不思議な経験だった。(いびきがいっぱい。これを最後の夜にターカイビストがいなかった

物事のバランスを機能する時が。ンカ気持ちを表れなかったように。

AM 1:09 みみれん × こじまれん × mamoru × Joyce

1:31 みみれん「ゾンはいっていうズをまわした」

※YouTube参照下さい。

車中

「フィールドワークと表現」というテーマから何か大きな枠になるかな…。

シェア・シェア・ホー

アイルのうた

記録

たべごっとどうやき

人を変える

ボックサーとそうとロウンター…トーカー

トークテーマ

? ? ? ?

今回のこのプロジェクトのアウトプットは、インタビュー本ではなく、みんなの中にインプットし、トークではなく、それをデザイン。

下道 トークをコミュニケーションにしてほしい!

1回性を出す。

タイコたたきのゆういちろうくんのオススメ店「大阪中心部よりも安くて、上手い!!」と追伸していた。

:48 又井さばながおか

:58 出る

:42 かん張くるみ!

:28 出る

:30 タイコたたきの夢を出る

:14 タイコたたきの夢

:26 出発 → 長野

:37 トークのタイトルを考えましょう

:39 善光寺SA

:49 出る

:07 屋敷山PA

:23 出る

:26 高坂SA

車内6時間

:40 出る

:50 妻籠SA

:57 出る

:50 1166 Backpackers

:10 打ちそば二本木仙

:20 お店を出る

:44 首つるど

:48

:58 帰る

:07 メンバーで9日間ほぼ毎日24時間ずっと一緒にいて、カンく濃い時間を共有できたことがとっても幸せで不思議な経験だった。(いびきがいっぱい。これを最後の夜にターカイビストがいなかった

物事のバランスを機能する時が。ンカ気持ちを表れなかったように。

:48 又井さばながおか

:58 出る

:42 かん張くるみ!

:28 出る

:30 タイコたたきの夢を出る

:14 タイコたたきの夢

:26 出発 → 長野

:37 トークのタイトルを考えましょう

:39 善光寺SA

:49 出る

:07 屋敷山PA

:23 出る

:26 高坂SA

車内6時間

:40 出る

:50 妻籠SA

:57 出る

:50 1166 Backpackers

:10 打ちそば二本木仙

:20 お店を出る

:44 首つるど

:48

:58 帰る

:07 メンバーで9日間ほぼ毎日24時間ずっと一緒にいて、カンく濃い時間を共有できたことがとっても幸せで不思議な経験だった。(いびきがいっぱい。これを最後の夜にターカイビストがいなかった

物事のバランスを機能する時が。ンカ気持ちを表れなかったように。

9:00ごろ できたてホヤホヤの宿ゲストハウス『タイコたたきの夢』。できて1週間!!

:48 又井さばながおか

:58 出る

:42 かん張くるみ!

:28 出る

:30 タイコたたきの夢を出る

:14 タイコたたきの夢

:26 出発 → 長野

:37 トークのタイトルを考えましょう

:39 善光寺SA

:49 出る

:07 屋敷山PA

:23 出る

:26 高坂SA

車内6時間

:40 出る

:50 妻籠SA

:57 出る

:50 1166 Backpackers

:10 打ちそば二本木仙

:20 お店を出る

:44 首つるど

:48

:58 帰る

:07 メンバーで9日間ほぼ毎日24時間ずっと一緒にいて、カンく濃い時間を共有できたことがとっても幸せで不思議な経験だった。(いびきがいっぱい。これを最後の夜にターカイビストがいなかった

物事のバランスを機能する時が。ンカ気持ちを表れなかったように。

8

1 Friday

長野 → 東京

"観光の日" by カーナビ

レンタカー返却前 たった15分、嵐のミーティング 車中

出会った人たちの言ったコトを消化して、自分たちの言葉ではなせるといいよね！

インタビューはそのまま出さない。

読み手と作り手の温度差をどうしようか？

各テーマで、時に重要で話題にすべき人を確認しようね。

トークのイメージとしてあるのは、15分ぐらいにつかって、どういうふうに会ったか…をはなす。

それって、編集としてトークやるってことじゃん！

うん！トークの内容がおもしろくて、キーワードもでてくるような！

Q…も…これに何を足せばいいかな？

車の中で話した時間＝構築の場！

7/24～8/1のじかばらには「旅のイントロダクション」を足して、ある程度チューニングしてもらうかな…。

9日のミーティングで「ハイライト」としてえらぼう！

リハをやろう！

キタキター！おもしろい！

このチーム、舞台人が3人もいるし、リハやるってなったらいこいでないよ？？？

0 15 30 45 60min

前日(7/31)の、車中 初本格編集会議

おえし | 収集法 | スタイル | 記録と表現

道

編集のプロ青野さんに旅ラボの編集を見てもらおう。

フィールドワーク を主語に④本の本を立てて、取材内容を分類。

構築の場でコトかトークでもできるとイイ！

とちらをA面、どちらをB面…と、とうえるか？

車中の見取図があるだけで大切な場だったコトが伝わる！

B面にインタビューに関わるから書かなかったコトを足そう！

必要なのは、私たちが認識を共有してるコト。トークで誰かがアウトとも修正できるように、ね。

よくやるのは…たのしかったをするとこの流れが出る。というのを…ひとつのフレーズ化する…どういう方法…

Qロにタイムキープしてもらおう

Qロ、Uさんがokか確認ね。

「これはただ話しているのではない」と、思わせないために、すべてこと、を、しすぎないことも大切！ダラダラ～に、時おりパリッと何か入る。

14.-8. 7220

入館券
平日
朝風呂
06:43

:27 海ホテルイン行く

:47 福光映像到着

:52 昼ろ

:30 ミーティング"

→:45 終わる 丸山君が車をとりに行く！

:46 青野車内インタビュースタート

今回はQロもインタビューに積極的に関わる。

青野さんに会えて全員エキサイト！

(下道) 杉本隆、村上隆

ある歴史の中に位置づける遊び

これ自体は評価したとしても、作品ごとで、美しいかどうかは別のコトだよね。

(mamoru) なぜアウトプットしないといけないのか？

:12 そば処、昼食。

(mamoru)「自分ほどのことではない」と本人が思っているところにこそ聞くべきことがある。

(下道) 今切り取って今文句＝本との違い。

:19 ガソリンスタンドを出る

丸山「spectator」の編集に関わる人数、多分このくらいが良い。ある一定の人数を超えるとこわれる。

車内3時間

Qロ 100年、200年のこしたい…という意識って何たろうね。青野さんと川瀬さん、民博…。今言葉で、今つくる…。直接的な「残す」という意識ではないかもしれないだ…。

:52 Spectatorを配る

:56 配る

:58 セブンカフェ

:59 配る → 新宿に向かう

雑誌…とのちがい！

※レンタカーを返却

:20 新宿に到着

「車を返すまで…」という旅の疲れが押し寄せる中、新宿の雑踏をキャリーケースをがうがうっていりながら、カラオケで最後のMTG。ひたすら書き込みを行う。

2時間後、「アハハ…1時間ですが延長しますか」という問いにNO。急に外に出る。月報をコピーするためコンビニに向かう道中、ちんと旅の全てが凝縮された月報を読める！それだけだろう、ダッシュして戻るとオリオリでて、あぶない、あぶない…。

:37 カラオケで作業 業務 SHIDAX 986号室

ルリアール、ガスト、イタリアントマト、サイゼリヤ、miniSHIDAXにたどり着くまで5件にアタック

米のB面をそれぞれ持って帰るのがいちばんよいように、コンビニで人数分をコピーする。Uさんのおかわりで料理を少しして(それでも4人分!?)ロールキャベツのお店に入る。

テーブルが狭くてじゃっぴゃうび 全員疲れ果てた表情でロールキャベツを食べる。7月30日の仙台コピーするのを忘れたからか…一番なんかかしこまっているように見える。

30分ぐらい内で反省も済ませ、「楽しい旅をお疲れさま！」と解散。トークショーは一週間後。

運転 (W)(下)(J)(山)(丸)(ジュ)

そういえばmagazineって銃につめる弾倉と同じだな⇒語源って何だろう？"

雑誌 倉庫 雑貨 雑誌

大ちん 雑誌、雑っていい言葉だね

マモル、Qロ 英雄誌の「マガジン」の意味を考える。銃のマガジン。"入れておくモノ" 倉庫、箱 店



日本列島は四国地方を除いて、北海道・本州・九州を結んだ道のりで約3,000kmなので、約1.5往復を移動したことになる!!

1856km

『アラビア語では「makhāzin」。フランス語では「magasin」などなど…で、これらの言葉は「倉庫/保管する」という意味をもっているそうです。英語では軍隊の用語で「magazine」が「火薬庫」という意味だった。この語が転じて、弾倉という意味になったようですね。1731年のGentleman's Magazineで、「知識の倉庫」という意味で「magazine」という言葉が使われたそうです』←ベストアンサー

車中 トークと冊子について…

- インタビューした人たちの言ったことを消化して自分たちの言葉で話すと最高。
- トークの内容がおもしろくて重要なキーワードでてくる。それに何を足せばいい？
- 車の中で話した時間＝構築する場だった。それがトークで出るといいな…。
- 読み手と作り手の温度差をどうする？
- A面とB面…何をどう届ける？
- トークの構成？演出？表現？

6人の旅での役どころをトークにも活かそう。

(mamoru) 記録したものを見せるのではなく、編集したものを見せる。そのためには記録が必要。